

フリード神父に性根が腐ってる奴が憑依した

()

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特典を貰ってフリードに憑依した奴の話。

※注意※

主人公の特典は主人公の願ったことがそのまま反映していますので主人公の言葉とズレがあります。

主人公は屑で下種で外道です。

キャラ崩壊が酷いです。

お気をつけください。

目次

番外編

ライザー戦（上）	1
ライザー戦（下）	10
イツセー君を原作より強くしようぜ！	
俺様フリード・セルゼン	20
アーシアちゃんマジ聖女！だがッ！俺様は外道ッ！	31
俺様には神器の育て方が分からないよ	
……	42
聖魔剣を手に入れろ！	
俺様そろそろ聖魔剣が欲しいんです！ （希少価値的な意味で）／グレモリー眷属	

の現状

俺様不覚！次は倍返しだ！	66
俺様は聖剣回収に行くんだ……ウレシイナー……	76
まさかの俺様、大ピンチ！	85
俺様能力使いまくリイ！！	99
カオス……なんとかに入ったよ！！	
俺様はカオスなんちゃら！	108
俺様は会談を見ている。	120
やつと俺様の出番だよ！	131
俺様とオツチャンと／フリードの被害者達	143
俺様の作戦は順調？／原作主人公：兵	

藤一誠

俺様はベリアルっちとお友達っ！ (出

番があるとは r y) / H + E R O の姿は

⋮
⋮
⋮

165

157

番外編

ライザー戦（上）

——ライザー・フェニックスは混乱していた。

その理由は婚約者であるリアス・グレモリーにあった。

「……………なあ、リアスなぜそんなにも疲れきった顔をしているんだい？」

ライザーは聞いた。自分と会おうと『嫌そうな顔』をされることは多々あったが『疲れきった顔』をされたことはなかったからだ。その上女王クイーンと新人（アーシア）以外の眷属の様子が可笑しいのだ。

戦車ルックである塔城小猫は前よりずっと大人しく、ライザーが目を向けるとサッと顔を避けるのだ。

騎士ナイトである木場祐斗は鋭い目付きをしていて穏やかさなど欠片も無い。

兵士ボーンである兵藤一誠は妙に殺気だっている。本当に殺しに来そうなほどの殺意がライザーに向けられている。

だからライザーは珍しく、本当に珍しく本気で心配していた。

「……………そう……………貴方に気遣われる日がくるとはね…」

リアス・グレモリーはそう答えるとどこか遠くを見ていた。

「……グレイフィア様」

「なんでしようライザー様」

グレイフィア・ルキフグスも隠してはいるが内心は「なにがあつたのか」という疑問に悩まされていた。

最初に会つた時からなにか可笑しかったが眷属までとなると本当に訳が分からない。

そんな状況でライザーはグレイフィアに尋ねた。

「これって話をして良いんでしょうか……？」

ライザーがこれなのだ。状況がどれだけマズイかが分かる。

暫く考えグレイフィアは答えた。

「………大丈夫でしょう」

「そ、そうですね」

ホツとしたのだらうライザーがいつもの調子で話しかけた。

「なあリアス、そろそろちゃんと話しをしないか？」

「話し？」

「婚約についてだよ。君が我が儘を言うからこっちは大変なんだぜ」

「ああ、その話し………」

リアスは一度息を吸い込み、吐き出す。

そうしていつも通りに戻った、と思われたが…

「……ライザー条件付きなら良いわよ」

「おお！本当かいリアス！」

「ええ」

なにかの『覚悟』を決めてリアスは言った。

「レーティングゲームをしましょう。もちろん非公式の」

「………なんだって？」

「聞こえなかったかしら？レーティングゲームをしましょうと言ったの。貴方がレー

ティングゲームで私に勝ったら結婚してあげても良いわ」

リアスのなんとも思っていないかのような物言いにライザーは苛立ちを覚えた。

「……正気かい？君の眷属はここにいますのですべてなんだろう？それに会場はどうするの？」

「ええ、そうよ。此所にいるのが私のすべての下僕。会場はお父様かお兄様にでも用意してもらおうわ。……できるわよねグレイフィア」

ほぼ確信してるかのような物言いだった。

そしてグレイフィアが答える。

「……可能です。いえ、そもそももしも縁談が拗れたときはレーティングゲームで決着をつけて貰う予定でしたので」

「そう……やっぱりそうなのね……」

リアスは溜め息を吐いた後にライザーに言った。

「だ、そうよライザー。受けるの？受けないの？」

「……やっぱり今日の君は少し疲れているみたいだ」

パチンツと、ライザーが指を鳴らした。すると魔方陣が浮かび上がりそこから15人の美女・美少女が出てきた。

「なん……だと……ッツ!？」

今まで殺意を向け続けていた一誠がようやくブレた。

「なんて野郎だコイツ……う、うううううううう」

泣いた。殺気だつてたやつが突如泣き出した。訳が分からないという様子でライザーがリアスに尋ねた。

「なんで君の下僕君は俺の眷属を見て号泣しているんだ……？」

「それはイツセーの夢がハーレムだからよ……」

リアスは言いながら自分のこめかみを押さえていた。

「——ほう」

ライザーはニヤリと笑い眷属の一人ユーベルーナを呼んだ。そして――

「ん」

「んっ」

――キスをした。

「ひいつ………ツツ!?!」

それを見て小猫が震えた。

「大丈夫よ。大丈夫大丈夫だから……」

いつの間にか移動していたリアスが小猫を慰める。

そしてライザーを叱った。

「ライザー! 小猫の前でそういうことしないでくれない?」

「な、なんだよりアスく良いところだつてのに……」

ライザーが戸惑いながらからかい半分で聞いた。

「それとも無理矢理された経験でもあるのかい?」

「ひう………ツツ!?!」

「ライザー?」

「ハハハ、そりゃ災難だったなあ。なんなら俺が上書きしてやろうか?」

ライザーの問いに答えたのは意外なことに小猫本人だった。

「そ……それは……無理……です……」

「——なんだと？ どういう意味だそれは？」

ライザーは自分の大事なものを否定されたと感じたライザーは小猫に問いかけた。

「無理……です。あれはそんなものじゃない……」

「こ、小猫？」

「口をつけ……たら……もう……抗えない……なにもできない……ただ……ただ……されるがままで……なにも……できない……ツツ!!」

小猫は震えながら自分の身を抱き締めていた。だがそれを言う小猫の表情は可笑しなものだった。顔は蕩けているのに恐怖で涙出ているのがわかる。そんな可笑しな表情。

「小猫、大丈夫だから。アイツはいないから」

「ぶ、部長……」

小猫は落ち着くまでリアスに抱きついていた。

「部長」

そんな中一誠がリアスに聞いた。

「部長はアイツと結婚したくないんすよね」

「……？ ええ、そうだけど……それがどうかしたの？」

「いや、だつたらですね——」

——此所で全員倒しても良いんじゃないっすかね？

一誠は『赤龍帝の籠手』を展開して構えた。

ライザーがバカを見る目で一誠を見て溜め息混じりに言った。

「ミラ——やれ」

「はいライザー様」

そう言つてミラが一誠のもとへ向かう。

次の瞬間ミラが殴り飛ばされていた。

「かつはアツ——!?!?」

「ふっ——ふうー」

これほどまでか、リアスは思った。この短期間でこれ程までに強くなったのか、と。

「やめなさいイツセー。ライザーもう一度だけ聞くわ受けるの？受けないの?」

「——受けるさ、受けてやる。俺の眷属に手を出したことを後悔させやる」

そうして此所にレーティングゲームが成立した。



——夜になりソーナ・シトリーは悩んでいた。

その理由は親友と親友の眷属の変化、そして突如決まった親友と親友の婚約者のライザー・フェニックスのレーティングゲームについてだった。

「リアス……」

親友の名を呟く。するとソーナの眷属の一人である女王クイーンの真羅しんら 椿姫つばきに話しかけられた。

「会長は……やはり心配ですか……?」

椿姫の言葉をソーナは肯定をした。

「……ええ、今のリアス達はなにかが可笑しい……なにかは分からないけど……それでもなにかが可笑しいことだけはわかるから……それに、そんな状態でレーティングゲームなんて正気の沙汰じゃないもの」

ソーナは墮天使の一件でリアス達になにかあったのだとリアスの眷属の異常な状態から気づいていた。

だがリアスは「大丈夫だから……」と言い自分は悩むくらいしかできなかった。

「……会長はどちらが勝つとお思いですか?」

持つて当然の疑問を椿姫は躊躇いながらもソーナに投げ掛けた。

ソーナは答えた。

「わかりません。普通に考えれば多くの経験を積んでいるライザーが圧倒的に有利ですが……今のリアスは何かをしそうなので……」

「なにか？」

何かとは一体……？そんな疑問が椿姫の頭に浮かぶ。

ソーナは躊躇いながらも答えた。

「……何かです。なにかは良くわかりませんがなにかある気がするんです……」

ソーナの感じたそれは才女故の直感だった。

「……始まりですよ。リアスのゲームが……」

そうしてリアスのレーティングゲームは始まりを迎えるのだった。

ライザー戦（下）

——まずは塔城小猫の話しよう。

小猫は強くなるためには自分の長所の腕力や防御力を伸ばすつもりだった。

だが、フリード・セルゼンとの戦いで『力』だけではどうにもならない絶望を知ったのだ。

次もしもフリード・セルゼンに会ったとき小猫は自分が何をするか分からなかった。

もしかしたら、またあれをしてくれと頼むかもしれないし、もつともつとあれが欲しいと縋り付くかもしれない。

逆に全力で殺しに向かうかもしれない。

それが分からない。どれになるか自分でも分からない。

だからこそ小猫は壊れかけているのだ。

それはまさに悪魔のような技術だった。
それはまことに悪魔のような技術だった。

甘い言葉で惑わしてそれを選べば墮落する。
それは抗いがたく『力』ではどうすることもできないモノだった。

理性が無くなり本能が出てくる、そんな状態では抗えるわけがない。

だから、小猫は『速さ』も求めた。

もう決して捕まらないように絶望の最中にも『速く』なるために自分の動きを最適化していたのだ。

自分の『力』で『速さ』を引き出せるように。

それがフリード・セルゼンとの戦いで小猫が覚えた2つ目のことだった。



レーティングゲームが始まり、指示通り塔城小猫は体育館に到着した。

「来たわね……って1人？」

「はい……」

体育館にはすでに敵の眷族が4人いた。

1人は戦車^{ルーク}他の3人は兵士^{ポーン}だ。

敵の戦車が言う和小猫は静かに答えた。

「そう……まあでも全力でやらせてもらおうよ！」

「すぐに終わらせます……」

小猫は小さく拳を構えて前に出た。

戦車は強いが兵士はそうでもない。1人ずつ確実に仕留めれば勝てる。それが小猫の考えだった。

そして2人同時にチェーンソーで切りかかってきた兵士2人を——

「ふっ——ッツ!!」

「——ガッツ……!?!」

「ごっ——はっ……」

——瞬殺した。

「なっ……!?!」

「え……?」

戦車が驚愕の表情に顔を染め、兵士が呆けた顔で倒れた2人を見ていた。

小猫は決めた。自分に視線が戻る前に倒すと。

ゴツツツ!!

地面から爆音が響き、残りの兵士であるミラがぶつ飛ばされた。

ミラは体育館の壁に叩きつけられた。

そして、それはついに会場に告げられた

『ライザー様の「兵士」^{ポイン} 3名戦闘不能』

――

しかしそんな事には耳を貸さずに小猫は自分の最速で敵の戦車を殴り付ける。

「くっ………うううう………あああああああ!!」

腕をクロスして防いだ戦車だったが、そのまま吹っ飛ばされた。

「リアス部長………終わりました………」

『ライザー様の「戦車」^{ルック} 1名戦闘不能』

通信機を使ってリアスに言った。

『そう………なら作戦通り外に出て頂戴』

「了解です………」

小猫は返事をして外に向かう。

外に出た瞬間、小猫の耳に雷鳴が聞こえた。

小猫が落ちた方向を見ると、敵の女王クイーンが墜ちていた。

「あらあら、余所見をしてはいけませんわよ——女王さん」

姫島朱乃は敵の女王に言った。敵の。つまりこれは——

「作戦終了……敵の拠点へ向かいます……」

「私も準備に戻りますね——リアス」

「ええ、そうして頂戴。イツセーも祐斗も問題はなさそうだから」

——作戦だったのだ。

『ライザー様の「女王」クイーン 1名戦闘不能』



——次は木場祐斗の話をしよう。

木場祐斗はフリード・セルゼンとの戦いで自分の圧倒的な力不足を感じた。それと同時に聖剣への復讐心を思い出した。

木場祐斗という少年はリアス・グレモリーによって掬われていた。

だがそれは掬われてるだけなのだ。

いつ溢れ落ちるかも分からないギリギリの状態。

リアスによって掬われていた木場祐斗だが救われてはいなかったのだ。

だから、落ちるときはあつという間だった。

復讐心を軽く揺さぶられ、はぐれとはいえ神父に叩きのめされたことで聖剣への復讐心が噴き出したのだ。

フリード・セルゼンに『速さ』も『力』も『技術』も届かなかった。

だからこそ、木場祐斗はフリード・セルゼンに勝てるだろうと踏んだ『知恵』を求めた。

そもそも『魔剣創造』は大技だけで使うようなものではないのだ。

大技の中に小細工を混ぜ込んで戦えば、小細工は大技で隠され、大技は小細工のおかげで当たる可能性が飛躍的に上昇する。

それに気づいていれば別の目的で動いていたフリードなら1〜2秒はもったかも知れない。

だが、気づいたのは死に体になった後だ。
だからこれから鍛えていく。

木場祐斗は聖剣とフリードに復讐することを心に誓ったのだった。



『ライザー様の「女王」^{クイーン} 1名戦闘不能』

一誠はそれを聞いて安心した。

「良かったー向こうは上手くいったのかあ……木場アそろそろ終わらせよーぜ！」
一誠と木場が今いる場所には残りの敵が倒れ込んでいる。

兵士も騎士も戦車も僧侶もグラウンドで倒れているのである。

「そうだね……どれだけ強いかの確認も能力の練習も済んだし、終わらせようか」

木場と一誠はそう言う——

『赤龍帝からの贈り物』
ブリステッド・ギア・ギフト
 ソード・パース

『魔劍創造』

——敵に止めをさした。

『ライザー様の「兵士」5名「騎士」2名「戦車」1名「僧侶」1名「戦闘不能」

「なんなんですかの!?! 貴方達は!?!」

レイヴェル・フェニックスが絶叫する。目の前で起こったことがあまりにも信じがたいものだったから。

しかし、そんなレイヴェルの叫びを無視して2人はライザーのもとへ向かったのだ。た。



——最後に兵藤一誠について話そう。

一誠は純粹な少年だった。少々……いやだいが俗なところもあったが、1人の女の子のために命を懸けられる少年だったのだ。

そんな一誠は失敗したのだ。女の子1人助けられず、全身に傷を負ったことでむしろ

一誠のほうに助けようとした女の子アーシア・アルジェントに助けられた。

その結果は本人にとつてあまりに悲しいものだった。

助けようとした少女に助けられ、敵だと思った男が少女を助けていた。

その上、敵だと思った男にアドバイスらしきものを貰っても手も足も出なかった。

だから一誠は『力』を求めた。

みんなを守れるようにと願い、ただただ『力』を求めていた。

そうして兵藤一誠はフリード・セルゼンとの戦いで依存にも似た『守りたい』という感情を持ったのだった。



リアス・グレモリーは眷属全員でライザーの拠点に攻めた。

「くっ………よくもやってくれたなっ……!!」

ライザーは屋根の上で戦うことになっていた。

しかしそれはライザーにとって都合の悪いものでしかなかった。

ライザーの眷属はもう妹のレイヴェルしかいないので援軍は期待できない。

ならリアス達はどうか？眷属全員が残っており、リアスはいつても以上に冴えている。ベストコンディションだ。

「さあ、ライザー終わらせましょう」

「調子に乗るなより——」

——アスと続ける間もなくライザーの顔が吹っ飛んだ。リアスの『魔力』で。

頭が再生しだす頃には足から腹部にかけて木場祐人が凍りづけにした。

「ツツ——こんなものっ！」

ライザーが溶かすより先に雷が落ちた。

「がアアアアアアアツツ——!?!」

ライザーは痛みあまり叫んだ。

そうしてライザーが気絶するまでリアスとその眷属による痛めつけショーは続いた。ちなみに40分ほどである。

そんなこんなで『勝利』を収めたりアス達だった。

イツセー君を原作より強くしようぜ！

俺様フリード・セルゼン

「ヒヤツハアア!!屑が汚物を消毒だあ!!!」

やつほー、俺様フリード・セルゼエエンと言いまーす。前世は一般的な社会不適合者やつてました。あ、それ今もだわ（笑）

え? 『セルゼエエンが可笑しくないか?』 『前世つてなに言つてんの?』

いやーわかるよ、わかるわかる。不思議だよねえ。安心してください、説明しますよ!

セルゼエエンについてだけど、まあ、とーぜんつしよー俺様が勝手に伸ばしてるだけだし?

前世つてのはあ、俺様がテンプレ的な転生者だからだよー

神を名乗る奴に会つてえ「世界の管理をする神だけど、手違いなんだ仕方ないよね!

ごめんごめん、特典やるから黙つて転生しろ」的なことを言われてえー転生つつか憑依しました。

「この世界ハイスクールD×Dじゃね?」とか「やべえ、俺かませじやん!」とか憑依し

てすぐに思ったわ。

そんな俺様だが今は貰った特典で好き勝手やらせてもらいながら原作再構成中です。

なんでそんなことをしているのか疑問に思う人もいるだろう。原作再構成してるとに疑問を抱かない奴なんていないよな。いないよね!? つーか居てくれるなよ頼むから。

俺様の特典能力のに『吸収・奪取系』という能力がある。

分かると思うがこの能力は『吸収・奪取系の能力すべて』である。とはいえ俺の知らない能力は発動できねえし、結局のところ結果的には「相手の能力を吸収した」で統一なのでたいした意味も無いんだが。

ちなみに俺は「吸収・奪取系」この能力を『ダイソン』と呼んでいる。なんでかって? 分かるだろう?
それはさておき
閑話休題

要するに「俺様の能力『ダ吸収・奪取系』を使って主人公達の能力を奪って愉悦しよ
ぜつ(キラツ)」というやつだ。

「なっ……!?!」

「ん?」

おっと、考えてる内にどうやら主人公が到着したらしい。

「おや、おやおや、おやおやおや!!」

主人公・兵藤一誠のほうを向き、俺様は俺様一押し『狂喜の笑顔』をプレゼントしてやる。

「やあああああつつと来たのかい悪魔クン？」

「な、なんだよ…お前!」

「ええー、普通よおー人に名前を聞くときはまず自分からだと思わねえーかなあー」

「え…!?!」

兵藤一誠（以後は主人公君と呼ぼう）は一瞬、呆けるとすぐに再起動して言ってきた。
「……………いや、それどころじゃないだろ!人が死んでんだぞ!!」

主人公君に対してなんて返そうかなあ。選択肢なにあつたけ？

選択肢1：うん、まあ俺がやったしい？

選択肢2：幻覚だ（キリッ）

選択肢3：はあ？（すつとぼける）

ああ、そうだこれに決めた。

「……………はあ？なに言ってるん——嘘……………だろ……………どうということだよ、これええええ!?!」

「ええ!?!」

さあどうだ主人公!!到着したのは殺人現場。その場にいるのは神父姿のおかしな男、

しかし!!

その男は現場にいなから気づかなかったような反応を示した。

さあどうする主人公おおおおお—— ツツ!!

「……………いや、殺ったのお前じゃねーのかよ?!

「あ、バレましたー?」

「『あ、バレましたー?』じゃねえよ!!!」

あつさりバレちった。まあいいや。気を取り直して自己紹介から入ろうか。

「正解した悪魔くんには俺様の名前を教えて上げましょう!!俺様の名前はフリード・セルゼエエン!!いつの日か火影になる男だ!」

「さつきといい今といい、バカにしてんのか!!」

「あれえー、海賊王のほうが良かったかなー?」

「バカにしてんだな、そうなんだな、そうなんだろ!」

主人公君はどうやら、おちよくられるのがイヤなのだそうだ。

「大丈夫ですかフリード神父…………?」

「アーシア!」

「え…………イツセーさん!」

アーシアちゃんと主人公君が驚いていた。主人公君に俺様に言った。

「てめえ!!アーシアになにさせるつもりだった!?!」

主人公君はどうやら俺様が黒幕だと思っただけらしい。

……………え?マジで?

よおーし、なんて言おうかなあ……………よし!これに決めた!

できるだけ勘違いするようにニヤリと笑いながら俺様は言った。

「アーシアさんにはねえ、僕さんと一生縁の残るもの(友達)になつて貰うのサア」

「なにい!?!一生縁の残るもの(嫁とか恋人など)!!?」

「本当だよねえ?アーシアちゃん」

協会で一応伝えておいたし、上手くいけば良い反応をもらえるはずだ。

「一生縁の残る……………?……………ああ!はい!」

「アーシア!?!待て、考えな——」

「私たちお友達になつたんです!」

「——おして……………ええ?」

「……………?どうしたんですかイツセーさん?」

「そおーだぜえ。どうしたんだいイツセーくん?」

アーシアちゃんがキョトンとして俺様はニヤニヤしながら言ったやつだ。

「てめっ……………いや、やつぱり考え直してくれよアーシア、そいつはこんなことをするよ

うな奴なんだぞ!」

主人公君は死体を指やす。アーシアちゃんは指された方を向いて、顔を真っ青にして叫んだ

「え?——いやああああああ!!」

「あ、気づいちゃったかあ」

優しい優しい、聖女のようなアーシアちゃんは俺様に聞いてくる。嘘であつて欲しいという目をして。

「フ、フリード神父…?う、嘘、ですよね……?」

「ほんとだよん」

「な、なんで……」

「なんでつて言われてもねえ、その悪魔くんを呼んだからですけど?」

「そ、そんなの——」

「アーシアちゃんの意見は聞いてねえから」

そう言つて俺様はアーシアちゃんの意識を飛ばし、抱える。

「おおつとお……て軽っ」

「てめえっ!アーシアに何しやがった!」

「意識飛ばしたただだよおーん。慌てなすんな。アーシアちゃん置いたらすぐにでも——

—— 殺してやつからよ」

「ツツ!?!」

濃度の濃いプレッシャーは初めてなのだろう、主人公君は後ろに数歩下がった。

アーシアちゃんをソファに置いて、主人公君に向き直り——

「さて、ちやつちやつと終わらせますか」

「なん——」

—— 主人公君の両足を撃ち抜いた。

「がつ、がああああああああああああ!?!」

「イテエだろ。イテエよなあ。片足に六発ずつぶちこんだからなあ。痛くねえ訳がねえ

!!」

一瞬で間合いを詰めて倒れる主人公君の顔面を爪先で蹴飛ばした。

「ハッハア—— ツツ!!」

「ぐっ………があ………ツツ」

吹っ飛ばした主人公君は床に倒れて全身を痙攣させていた。

「さてつと、そろそろ赤龍帝の籠手ブリステッド・ギアの能力を奪わせてもらうけどよお、構わねえよなあ」

返事は返ってこない

「返事は無い只の屍のよーだつてか、なら貰うぞお前の能力カ」

魔法陣が現れた。あれはたぶんリアス・グレモリーのものだろう。

魔法陣から悪魔が飛び出てきた。俺様に斬りかかってきやがったので右手に持っていた光の剣で防ぐ。

「——ツツ」

「おつとお」

金属同士がぶつかり合う音が響いた。

「邪魔させてもらうよ悪魔祓い」
エクソシスト

「邪魔だと思ふなら消え失せる雑魚悪魔」

剣を持った悪魔に続いてポニテとドチビが出てくる。

「あらあら」

「……………悪魔祓い」
エクソシスト

「団体さん、ごとおーちやくうーってかあ？」

「——消し飛びなさい」

俺様目掛けて『滅びの魔力』が飛んで来た。俺様はそれを——

「やなこつた」

——蹴飛ばした。

新しく出てきた赤い髪の悪魔含め、悪魔達は顔を引き締めていた。

「おやおや、これはもしかや!? 無能姫リアス・グレモリーではあアアアありませんかああああああああ!」

「誰が無能姫よ! 外道が!」

魔力が飛んで来る。

「効かねえよ。邪魔くせえ」

「なあっ……………!?!」

剣を持った悪魔・木場祐斗がリアス・グレモリーに指示を仰いでいた。

「……………部長どうしますか?」

リアス・グレモリーの判断は思いの外早かった。

「イツセーを連れて逃げるわ。私と祐斗で足止めをするから、朱乃と小猫はイツセーの回収をお願い。」

「「了解」」

木場祐斗とリアス・グレモリーがこちらに来た。

「邪魔だつてんだろおがクソ悪魔あ」

「足止めを任されたのは僕だからね、行かせないよ」

「私もいるわよ」

木場祐斗の剣戟を相手にしていると魔力が飛んでくる。

「祐人！」

回避の準備が整ったのだろうか。

「わかりました！」

木場祐斗が返事をした。……なにも出来ないのは癪なので嫌味の一つでも言おうか。

「……………なあ、騎士様よお」

「なん——だい——ツツ」

近距離まで近づき耳元で言った。

「——復讐はもういいのか？」

「——」

木場祐斗から怒気が吹き出る。

「——で——を——た」

「あ？」

「どこでそれを知った！」

声が低なった。だが——

「祐斗！」

——リアス・グレモリーの邪魔が入った。

「チッ」

追わなくてもまた会えるし、まあいいか。

打算的な考えのもと悪魔を逃がすことに決めた。



悪魔が逃げたあと、俺様はアーシアちゃんを背負い教会に戻っていた。

「んっ……んんう……」

「アーシアちゃん、早く起きないと襲っちゃおうぞおー」

「ふえ……?」

「はよー、寝るなら教会についてからにしてねえー」

「え……あ、はい!」

いい返事をするアーシアちゃんを背負って歩く。

ああ、明日はなにがあるだろう?

アーシアちゃんマジ聖女！だがッ！俺様は外道ッ！

さうてさて、翌日になりましたア。

いやあく昨日の件でアーシアちゃんにお話しされちゃいましてえ、実は結構疲れ気味い。

アーシアちゃんには謝ったあとに「こうでもしなきや俺達は生きてけないんだよ」とか「努力はする」とか真面目っぽい声音で言ったら、まア・さア・かア・のオお許し＋『純粋な笑顔』頂きましたアアアアアア！ ヒヤツツツツツツハアアアアアア！

俺様の『狂喜の笑顔』の比じゃないね！ああ、でも破壊力は（別の意味で）俺様のほうが上だなア。

人殺しに笑顔向けちゃうアーシアちゃんマジ聖女！

え？天使じゃないのかつて？天使なんかと一緒にすんじやねえよ。

アーシアちゃんほど可愛くて優しくて可愛い女の娘はいねえーぜ多分。大事なことは二回言つといたぞ。

あくああ、つうーかあれだな、デオドラ？デイダラ？……まあ、とにかくアーシアちゃん狙いの悪魔の気持ちもわかるわあ

え?外道?屑?ド三流?なあにいをいまさら仰ってるんでしょオオカアア!

それはさておき
閑話休題

俺様は今アーシアちゃんとデート中でええええあります!

まあ、デートと言っても逃げようとしたアーシアちゃんを「ありい〜お出掛けですか
い?アーシアちゃん」とか言つて無理矢理引つ張り出したんだけどサア……

「フリード神父?」

おつとお、考えてる内にポーっとしてたらしい。

アーシアちゃんが俺様の顔を下から覗いている。

「どおかしたかなあ〜アーシアっち」

「ア、アーシアっち……?」

「HHHH細かいことは気にしなすんな」

「はい!」

毎度思うがこの娘、返事だけは良いんだよなあ。

「……………あ」

「ん?どつたのアーシアたん」

ああそつか、公園はこの辺か。そーだ主人公君をおちよくりに行こう！

「あ、あれ、ひよーどーくんじゃね？」

「え、あ、いや、違います！」

「ええー誤魔化さなくても良いじゃねえかよお。ひよおおどおおおくうううん！
あーそーぼー！」

俺様が叫ぶと主人公君はアホ面全開でこちらを向いた。

「え？」

「やあああああつと会えたねえ〜ひよーどーくうん？」

「テメエは……!!」

「おーおー威勢だけは良いじゃねえの。なんならよお昨日の続きシテヤロウカア。」

「ツツ！」

俺様が言うとう主人公君が怯む。しかし――

「フリード神父!!」

――アーシアちゃんの邪魔が入った。

「ジョーダンだつてアーシアちゃん！H A H A H A」

「え、あ、そうだったんですか…」

アーシアちゃんはホツとしていた。うんうんジョーダンジョーダンジョーダンだよ。

能力奪ってないのに殺して堪るかかってんだ。

「アーシア待つて!良く見てそいつの目を!笑ってない笑ってないから!」

「大丈夫ですよイツセーさん。フリード神父は話せばわかってくれる人ですから」

アーシアちゃんは笑顔で言った。

アーシアちゃん信頼してくれてありがとう!

でもごめえーん、どーでもええねん信そんなもん頼。

「……………」

主人公君がこちらを睨み付けてくる。なんかムカついてきたぞ。なんて言ってやろうか。よし!

「アーシアちゃんごめんよ……………イツセー君は俺のことを信用できないらしいから……………」

俺は……………帰るよ……………」

できるだけ悲しそうに表情から動作まですべて演技で貫けば——

「イツセーさん!」

——心優しい聖女サマは俺様を庇ってくれるだろうから。

「ア、アーシアちよつと待つてくれ、こいつは人を殺したんだぞ!」

「そ、そうですけど……………」

朝からそんな事叫ぶなよ。まったく音を遮断してなかったらどーなってたやら。

俺様が思考に没頭しているとアーシアちゃんが話し掛けてきた。どうやら話がついたらしい。

「フリード神父！」

「なにかな…アーシアちゃん……」

暗い雰囲気を漂わせながら俺様は言う。

「イツセーさんも一緒に出席することになりました！」

うわぁー元氣ハツラツだー

「おおーう、俺っちも居ていいのかい？」

俺様はそう言つて主人公君に視線を移す。

「…………アーシアがどうしても言うから仕方なくな。仕方なく！」

「あれまあ、俺っち嫌われちったかぁー」

「当たり前だ！人の足撃つといて嫌われずにすむか!!」

「H A H A H A」

『『H A H A H A』じゃ、ねえーよお！』

「悪かつたつて、な？」

悪びらずに言う俺様だがアーシアちゃんがバックについてるし大丈夫だろう。

「くっ……うっ……」

めっちゃ喰ってるよ。主人公君。

「それじゃあ、行きましよう!」

アーシアちゃん相変わらずテンションめっちゃたけえー

「よーし、どこいくべ」

「おいちよつと待ってくれよー」

そうして俺様達はお出掛けを楽しんだのだった。



「やあー、楽しんだわあー」

俺様が言うくと主人公君が呆れた口調で言ってきた。

「結局テメエーが一番はしゃいでんじゃねえか」

「あはは」

あのあと飯を食いに行ったり普通に雑貨店見に行ったり、ゲーセンに行ったりしたのだ。そう、ゲーセンに。

俺様のテンションは上がっていた。シューティングゲームで満点とったりしたのは良い思い出になった。

そんな俺様を見たからか主人公君は警戒心が解けていた。アーシアちゃんからも稱賛を頂いたので気分が良い。

「……………なあ」

「ん？なんじやいイツセー君や」

「……………なんでお前あんなことしたんだよ」

「あんなことお？」

「昨日のことだよ」

「あぁー」

主人公君は俺様が人を殺す理由が知りたいらしい。アーシアちゃんもなにも言わな
いが気になるのか、こちらを見ている。

それに対して俺様はこう答えてやる。

「何でだと思おう？」

不適に笑う俺様。主人公君は言う。

「真面目に聞いてんだよ！」

「こつちだつてマジだつ——」

あぁ墮天使が来たか。

「——何をしているのかしらフリード・セルゼン。いいえ、いいわ答えなくても。まさ

か貴方が

アーシアが逃げるのを手伝うなんてねえ」

めんどくせ、しらばっくれよ。

「おいおい、なんの話だよ姉御。俺っち達はただ”お出掛け”してただけだぜい」

「あら、しらばっくれるつもりかしら。まあそれならそれで殺すだけだけど」

「待つてください!私が勝手に逃げようとしたんです!フリード神父は関係ありません!」

アーシアちゃんありがとう!君の犠牲は無駄にはしない!

「おいおい、どういうことだよそりゃあ」

「ふ、フリード神父…」

「やっぱりそう言うことかよ!」

主人公君の腕セイクリッド・ギアに神 器が顕現する。

「フリード今すぐアーシアを回収してその悪魔を殺しなさい」

「あいよー」

俺様は主人公君を遠くへ蹴飛ばし、アーシアちゃんを回収する。

「んじゃ、帰りましょか姉御」

「私は殺せと言ったハズだけど?」

「あんな雑魚にいちいち目くじらたてないでくださいよ。それに殺したら殺したでアーシアちゃんがるせえーつすよ」

「……………それもそうね」

そうして俺様達はさっさと教会に戻るのだった。



儀式の直前レイナーレ以外がいなくなった時を見計らい教会の地下に行った。

「ハロー姉御さぁん」

「フリード？ 外の見張りをしておくように言ったハズよ。さっさと働きなさい。それとも、言われたことすら出来ないのかしら」

レイナーレの機嫌が悪くなる。

「いやあく悪いねえ姉御さん。頼みごとがあつてさ」

「頼みなんて受け付けないわ。働きなさい」

さらに機嫌が悪くなった。

「いやあくあのさぁ」

「だから——」

「——喰われてくれや」

言い終わる前に俺様はレイナーレの腹を蹴りつけ行動不能にする。

そして――

「いただきまあゝす」

「く…え、いや、い――」

「――ごつくんつと」

――丸飲みにした。

使った能力は『うえきの法則』の『地獄人・守人の一族』が使う『吸収』である。

この能力は『うえきの法則』が好きな俺様にとつては実に喜ばしいものだが、それと同時に丸飲みにすることが気持ち悪く感じる。微妙な能力だ。

それはさておき
閑話休題

まあ、とりあえずはアーシアちゃんはテキトーに寝かせておこう。邪魔にならないように。

これから俺様のためのショーが始まる。

さあ、早く来いよ悪魔ども!

狂気的な笑顔で俺は外に出る。

あはひやはははあっはははははははっひゃーひゃーひゃひゃ
俺の笑う声が教会中を響く。

ああ、楽しみだなあ早く早く早く来ねえエエエなああアアア

俺様には神器の育て方が分からないよ……

——
遅い

40分経過ッ！いや、41分経過ッ！

「……………」

あるえ？ちよおおおつとばかし遅すぎねえ？え？なに？まだ待つこのこれ？

アーシアちゃんの命掛かってんのに遅すぎね？主人公。

いやいや待った。思い出してみよーぜ。

原作は良く覚えてねえけど、たしかアニメではアーシアちゃんが『セイクリッド・ギア神器』を抜き取られた時に到着したハズだけ……ど……

「……………あ」

どーしよ…俺様重要なことに気づいちまったよ…

そーいや俺様『セイクリッド・ギア神器』抜き取る儀式がどれくらいで終わるか知らねーじゃん♪

「こつれは萎えるわあ。いやマジで」

独り言状態の俺様。なんか寂しいなあ。

くつそ。もう何て言うかこう「戦いは、まだか」って感じだったのにいい……………

あーやべ、眠くなってきた。

「……………」

まだかなあ…

「……………」

もうちよいかな？

「……………」

……………おやすみなさ——

「——オラア!!」

「……………」

主人公君とーじよー。俺様の睡眠時間は0分。待ち時間は二時間。

うん…何て言うかさ…

「デメエはフリ——」

「——タイミング考えろやアツ！」

開幕早々蹴っ飛ばす。いや軽くだよ、軽く。2〜3メートルすつ飛ぶくらい。

「イツセー君!？」

「!？」

入って早々仲間がすっ飛ばされたことで驚いている悪魔二人。

「……………よし」

俺様は密かにガッツポーズをした。

「君は前の『悪魔祓い』だね……」

剣士サマはお怒りのようすだ。何に対して怒ってるんだろーなあ。主人公君蹴飛ばしたことかな、それとも前の発言かなあ。

まあ、とりあえず煽ろかなあ。

「あ、あなた方は！無能姫リアス・グレモリーの眷属サマじゃああアアアアアアありませんかアアアアア！」

園児並の煽りどんな反応を見せてくれる!？」

「僕らの主をあまりバカにしないで貰おうか……ッッ！」

「部長への悪口はやめてもらいます……ッッ！」

剣士サマとチビが攻撃してくる。剣士は正面から斬りかかってくる。チビは真横から殴り付けてくる。

けどまあ——

「通用しねえーよ、雑魚悪魔どもが」

——意味ないよね。

所詮は雑魚だ、テキトーに捌けば良い。

つーかもつと強い奴を吸収してる俺様に届く道理はねえ。
上級以上の悪魔とか

まあ、今回は『赤龍帝の籠手』ブリステッドキアをできる限り育てなきや行けねえし、軽くノックアウトしておいて後で使うか。

チビを蹴つ飛ばして剣士サマの両腕を——へし折った

「ぐツ……がアアアア……ツツ!？」

「痛い!? 痛いよなあ!? どーよテメエから突っ込んで来ながらあっさり返り討ちにされる気持ちはア!？」

「祐斗先輩……ツツ!」

「ああ……ああ! そうだよ! これだよ! 俺たちが求めてるのは!」

テンション上がってきたアアアア!!

「なにを……!」

怒ってるなあ。怒ってるよお。仲間やられて怒ってる。

「ああ〜お仲間やられて怒っちゃったあ? 良いねえ良いぞお……それでこそボコる意味が出るってもんだ!!」

「てんつつめええええええええええ!!」

「おろ?」

いつの間にか復活した主人公君が向かってくる。

けどさあ……

「お前何ができるんだよ」

顔面にグーパーン

「ぐつぶ……アア……ツツ」

次はみぞおち狙いの膝——

「させません……!!」

——蹴りはチビの腕にヒットした。

「小猫ちゃ……ん?」

「くつうううう……!!」

「うツわあく女の子盾にしちやうんだあくひつどおーい」

「この……!!」

いい感じに主人公君も怒ってきたし、チビも片腕使えねえだろうし、そろそろはじめつかない。

「さあ、ショータイムだぜえ」

「くっそ……!!」

「イツセー先輩……今は逃げることだけを——」

——考えてください。なんて言う間もなく主人公君の右肩に俺様は3発の弾をぶち込む。

「いつ……つううううう……!!?」

「先輩……!」

「余所見はいけましえんよお、えくつと小猫ちゃん?」

使えなくなっている方の腕を蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。

「!?!」

無音の絶叫。悲痛の表情。腕を押さえて倒れこむ美少女。ああ、本当に——

「——そそるねえ」

チビに……いや、小猫に手を伸ばす。

主人公君が来るようにできるだけ不快に思うだろう笑い声を入れて。

「やらせつ……かアアアア!」

主人公君は『ブラステッド・ギア赤龍帝の籠手』を出した。

「ようやく出しやがったか……だが足りねえッ!!」

「がッ……!!」

倒れないように殴り飛ばす。

「弱いなあ……」

「くっ……そッ」

主人公君はこちらを睨み付け叫んだ。

「……んでだよ」

「あ?」

「なんで!なんでお前はこんなことするんだよ!これからアーシアが何されるかわかってんのかア!」

仲間がやられたことにたいする怒りとアーシアちゃんのことの怒りで頭いっぱいらしい。

……なら、それを利用しない手はねえ。

「儀式だろ?それがどうしたよ?」

「どう……しただっ……て?ふざけてんのかテメエ!」

主人公君の攻撃!意味ねえな。殴り落とす。

「お前はアーシアの友達じゃねえのかよ!」

「友達だよん。でもさあそんなことより俺っちは俺っちは俺っちでやりたいことがあるんですよ」

「ふっぎ…：けんなアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

『赤龍帝の籠手』が光る、がそんなことはどうでもいいと殴りかかってくる主人公
「いい感じ…：なのか…：う？」

軽く避けて足をかけ転ばせる。

ヤバイ、成長してるかよく分らない。

まあいいや。とりあえず今を楽しもう。

「ほらほら、こっちはいいのかい？」

俺様はそう言うて—— 剣士の足を踏みつけた。

「ッ………！」

意識の飛んでた剣士だが痛みで起きたようだ。

「おい、やめっ——」

「おっそいなあ」

剣士の足を踏み潰した

「いっ——!?!」

「あ」

無音の絶叫…：というか痙攣してるなあ…：…：うくん、あれ小猫見たあとだとも足りねえ
なあ……

ま、いつか。

「やめろおおおおおおおおお!!」

『Boost!』

主人公が殴りかかってくる。

『神器』の形がちゃんとしている。覚醒したのか？

「あらよつと」

軽々とジャンプで回避。回避した先には——小猫がいる。

「あつれえ……?」

なんで起き上がってんだろ。痛いハズだろうに。

いやあほんつとうにそそるねえ、あの娘^{小猫}。

よし、最悪の思い出をプレゼントしよう!

そう決めて向かいくる小猫の左ストレートを避ける。

「なっ……!?!」

あの状態から避けられるのか!?!とでも言いたげな表情だ。

突き出された左腕を掴み小猫の体を引き寄せそのまま小猫に——

「ん」

「!?」

——キスをする。

気持ち悪い奴にキスされるとかそーとー気持ち悪いよねえ。ハハハハハハ
だが、まだだ。

「——」
「——」
俺っちの舌が小猫の口の中を貪りつくす。さあ徹底的に気持ち良くしてやろう。この、女遊びが大好きな悪魔の技術テクニクで！

歯列をなぞり深く舌を差し入れ、動きを止め誘うように舌を引っ込める、すると小猫は舌を出す。

足腰に力が入らなくなっても体を痙攣させても、やめない、とめない、いいや止まらない。

小猫の顔が蕩けていき唾液が口から流れ落ち小猫の艶かしい声が教会内を響かせる。キツカリ一分間続けた。

「——」
「ふはっ」

「あ……」

小猫は膝から崩れ落ちる。

「て、ててててててててめえつ、小猫ちゃんに何しやがる!？」

見入っていた主人公がニヤつき赤面しながら叫ぶ。

……やつべ、ギャグ路線走ってね? あいつの男の性的な層スイッチがONになってるよ。どーしよ……うん、当たって砕けろだ!

「デイトプな方のキスでぎますよー」

「ぎますよー、じゃねえーよ!」

「見入っていたあんさんが言いますか」

「仕方ねえだろ! 男の性だ!」

「やられた娘猫からしたらたまったもんじゃねえなあ……」

「お前がやったことだろ!?!……つーかスゲーなこいつ」

最後の小声で確定だ。マジでギャグ路線に行っちゃったよ……

……今回は諦めようかなあ。

いや、でもこれってやり方変えればいけるかも……?

「まあ、ねえ、なんだって俺つちの技術テクはアーシアちゃんが啼いちやったくらいだからねえ」

俺様の『気持ち悪く笑う』こうげき

こうかは――

「あ?」

――ばつぐんだあつ!

「聞こえなかったのかえ? ならもう一度『俺たちの技術はアーシアちゃんが啼いちやつたくらいだからねえ』って言ったんだよ」

「……………なあ」

「ん?」

「それってアーシアの合意の上か?」

「シスターだぜえ、分かれよお」

「やつぱりてめえは殺す」

「いいねえ、やつと目的を思い出したか?」

俺様大勝利だぜ。

「てめえを殺してアーシアを助け出す」

「間に合うかな?」

不適に笑う俺様。睨み付けてくる主人公。

俺様はデカい声で言う。

「さア、第2ラウンドといこうやア!!」

「くっ……ううう……なんで届かねえんだよ……ツツ!!」

悩んでいるならアドバイスをしてやろう。

「もつと力引き出せよ」

「？」

「だーかーらー『神器』の力を引き出せって言ってるんだ！なあおい！お前はどなりたいたいんだ!?!」

この状況での敵からの助言をどう受け取るかが問題だ。

「…つと」

「ん？」

「もつともつともつと強くならなきゃいけないええええんだよおおおお!!」

『Dragon booster!!』

「もつとだアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

『Dragon booster second Liberation!!!!』

主人公は喉が裂けるかと思えるほどに吠えた。

「上出来……なのか……？」

「やっぱり良くわからん。まあいいや、そろそろ帰るか。」

「うつつつおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「おやすみ」

「ぐツ……がア……」

腹を蹴りつけ意識を飛ばす。

倒れた主人公君に『アジアちゃんは奥で寝てるよん』と置き手紙を残し全力で逃げ

た。
逃げたのである。

聖魔剣を手に入れる！

俺様そろそろ聖魔剣が欲しいんです！（希少価値的な意味で）／グレモリー眷属の現状

あのあと俺様は全力全開で逃げた。

主人公君の『セリクワッド、ギア神器』を成長させようとして剣士の足を踏み潰したり、アーシアちゃん
のことで嘘を吐いたりとほんつとにいろんなことをした。

え？小猫ちゃんへのデープなキス？あれは個人的な愉しみだから。

それはさておき
閑話休題

俺様は今ヘルパーだかヘルパーだかよくわからん聖剣狂いのおっさんを探している。
いるのだが…

「情報なさすぎイ…」

いやまあ俺様って決まった情報網がある訳じゃねえから？当たり前つちや、当たり前前

「なんだけどよお…」

「そんなことを考えているとどっからか声が聞こえた。」

「貴様がフリード・セルゼンだな」

「ほえ？」

「誰の声を確認するために後ろに頭だけ向かせると——」

「貴様がフリード・セルゼンかと聞いているんだ」

「——コカビエルの旦那がいた。」

「そうです！そうですとも！僕ちゃんがフリード・セルゼンでまちげえねえだアツ！！」

「妙にテンションが高いな……まあ良い。協力してもらおうぞ——」

「何に？と聞く前に期待していた答えが聞けた。」

「——戦争を起こすためにな」

「りよおおおおおおおおいつつすうううううううう！！」

「よっしやアアアアアアアツ！！俺様はやっぱりツイてるよなあ！」

「コカビーの旦那にテンション上げまくりで聞いた。」

「で、これからなにをすりゃあーいいいでしょおー!?」

「クククツツとコカビーの旦那の笑い声が聞こえた。」

「ああ……良いぞ……良い狂いつぶりだ……それでこそ仲間にする価値があると言うもの」

だ」

「そーでしようそーでしよう!! さア、俺つちに仕事をくだせえ!」

「いや残念ながらこれからバルパーと言う男にあつて貰う」

バルパー……? 誰それ?

「まあ、会つてみればわかる」

コカビーの旦那に誘われた俺様は『聖魔劍』のためにバルパーという男に会いに行くことになった。



「テメエはヘルパー・ガリレイじゃねえーか!」

なんとバルパーはヘルパーだったのである。

「ヘルパーではないッ! バルパーだッ!」

「^{わり}悪い悪い」

軽く謝り自己紹介をする。

「俺様フリード・セルゼエエェン! ヨロシクウ」

「……むう…釈然としないが良いだろう。私はバルパー・ガリレイだ」

「オツケーんじや仕事くれ」

自己紹介が済んだ今！俺様はソツコーで聖剣を奪いに行きたいだあつ！

「良いだろう。この因子を——」

「ちよいまちー！」

「——受けと……なんだ？」

……これはまさかメンドクセー下準備大量だつたり……？

「もしかて……やること面倒ごと大量にある？」

「……？当たり前だろう」

バルパーのおっさんが答えた。

「メンドクセーのはパスしちゃだめかなあ〜？」

「ダメに決まっているだろう！なにを考えている！」

バルパーのおっさんが叫ぶ。

「えええーとお殺しとかかなあ…」

「誰も答えるとは言つとらんわアツ！」

「なにおう！テメエが聞いてきたんじやねえーか！」

……そのあとバルパーのおっさんと俺様であーだこーだと言いつつ終わった。
ちなみに雑用することになった。

チクシヨオオオオオオオツツ——！！

《グレモリー眷属の現状》

リアスは激怒した。必ず、かの極悪卑劣な『はぐれ悪魔^{エクソシスト}祓い』を殺さなければならぬ

と決意した。なぜなら――

「私の……私……私……私……キス……ああ……」

「僕はツツ――まだツツ――復讐を果たしていないツツ――!!」

「もつと強くならなきや……みんなを守れるようにもつと強く……もつともつともつともつともつともつと……」

――3人の眷族が受けた傷があまりにも深かったが故に。

膝を抱えて目からハイライトが消え失せ、たまに顔を紅潮させたかと思うとすぐさま真つ青に変わる眷族：塔城小猫

聖剣への恨みを異常なほど思い出してしまい復讐に囚われた眷族：木場祐斗

自分の無力を知り異常なほど力に執着して無茶な鍛練を行い続けている眷族：兵藤一誠

3人が負わされたのは……いや木場祐人に限っては閉じかけていたのが開かれたと言うべきモノ……つまりは『心の傷』^{トラウマ}である。

このことについて話すには、まずリアスが見たことを先に伝えるべきだろう。



リアス・グレモリーと姫島朱乃は3人の墮天使を殺した後、教会内に向かった。

教会内に入った時に2人が目にしたのは――

「なによ………これ………ツツッ！」

――3人の眷属の倒れた姿だった。

いや、ただ倒れていたただけなら良かったかもしれない。3人は無惨に転がっていたのだ。

ボロボロの姿でうつ伏せに倒れている兵藤一誠。

両腕を折られ足も潰されて壁に背を預けるように放置されている木場祐斗。

口から唾液を垂らし小さな水溜まりの上で倒れている塔城小猫。

「これはいったい………?」

姫島朱乃は冷静に考え始めた。誰がどうやってこの状況を作ったのかを。

まず思い浮かんだのはレイナーレという墮天使がそれほどまでに強かったのか?という疑問だがすぐに否定した。

なぜなら、3人の墮天使の話や態度からせいぜい中級墮天使だろうと思っていたからだ。

すぐに別の可能性が思い浮かび、それだろうと確信した。

それは――

「フリード・セルゼン――ツツッ!!」

姫島朱乃が言う前にリアス・グレモリーが置き手紙を見つけ叫んだ。

フリード・セルゼン。それはリアス・グレモリーの『滅びの魔力』を蹴飛ばした狂人だった。

やはりそうかと思うと、姫島朱乃はリアス・グレモリーの怒りを抑えることを優先した。

「リアス抑えて……今はみんなの傷を治さなきゃ」

「——わかってるわよッ」

唇を噛み締めて吐き捨てるようにそう言った。

そのあと大変だった。

木場祐斗と兵藤一誠が重症だったが故に。なぜか塔城小猫は無傷だったが。

結局は教会の奥で寝ていたアーシア・アルジエントに協力してもらい『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』にて3人とも肉体的な傷は治したのだ。



あまりにも悲惨な状況だったが故にリアスも『覚悟』はしていたのだ。何かあったときは自分が声をかけるといいう覚悟を。

しかし、彼等は話をまるで聞かなかつた。塔城小猫にいたつては触れただけでおかしな表情になつていた。

万策尽きた状況で二人はフリード・セルゼンだけは殺そうと決めたのだつた。

俺様不覚!次は倍返しだ!

さあ、ようやく駒王町に戻って来たぜ!!

まったく最悪だったぜ。

与えられた仕事は雑用雑用雑用雑用、雑用ばつかだし!つーかそれ以外なかったし!聖剣回収はコカビーの旦那が全部やっちゃうし!

なぜ俺様が雑用だけなんだ……聖剣回収……行きたかったなあ……

ハハハ、泣いてないよー別に泣いてねえつすよおつ……

まあ、それはそれとして聞いてくださいよ!実は今、神父狩りの途中だったんですけどねえ!会つちやいけな奴と会つちやつたんですよお!

「……………不愉快だな」

「ん〜なにがあ〜?」

「その嘗め腐った態度だよ!!」

斬りかかって来やがった!あぶねえなあ、まったく常識と良識と道徳と人間性(笑)を考えろつての。

え?それは俺様のことかって?

違う違う。じゃあ、誰なんだって？そりや目の前にいる——

「ふっ——ツツ!!」

「ウワーコワイヨー(棒)」

—— 剣士サマに決まってるだろーが。

「いやあく参った参った。なんでいるんだか……」

「君のような輩が——出るからツ——だよツツ——!!」

俺様は笑うが剣士サマは剣を振る。

膂力で負けている相手に剣技だけで勝てると思ってるなら随分シアワセな頭なんだが……なんかあるよなあー

イタズラ小僧の目をしてるし、魔剣を使った搦め手かなあ……

「そんなんで勝てると思ってるのかアツ！」

しかし俺様そんな事は気にせずに聖剣で殴り付けた。

「がツツ——!?!」

剣士サマは転がっていく。

さっさと動きを止めてその辺に捨てておこう、そんな風に思うと剣士サマは立ち上がって言った。

「やっぱりツツ——それは聖剣エクスカリバーだなツツ!!」

剣士サマは怒り大爆発である。まあ、関係ないのだが。

「おやおやあまさか今更『ふくしゅーしたい』とか言っちゃいますうー?」

「言わないさ……ただ壊すだけだ!そしてお前も殺すフリード・セルゼエエエエエエエエエエエ——!!」

「うるっせえなあ……俺つちの迷惑だろおがア——ツツ!!」

剣士サマの全身にかすり傷をつける。

やつべ、愉しくなってきた……そろそろやめねえと…

「よっ、と……ふう〜」

息を吐き、剣士サマに向き直るが剣士サマは剣を支えにして立っていた。まさにギリギリだな。わざとだけど。

そうして俺様は話しかける。

「ねえねえどんな気持ち?目の前に憎くて憎くて仕方がないモノがあるのになにもできないってどんな気持ちイ〜?」

嗤った。めっちゃ嗤った。剣士サマを嗤ってやった。

だが剣士サマは終わっていないと叫んだ。

「……………なにを言ってるか分からないな……僕はまだ立っている、終わってなどいない!」

た雑魚に一矢報いられた感想は……………」

はっ、ははっ、コイツうっ

「——ああ、拷問したくなってきたよ。なんなら受けるか?今なら特別にフルコー
スお見舞いしてやるけど?」

「雑魚の戯れ言くらい聞き流したらどうだい?器が小さいよ?」

「器だあ?俺様の器が小さいなんざ当たり前だろオが、サイズで言うなら一般人がサツ
カーボールで俺様のは細菌だぜえ?」

挑発はムカつくが、ああ…クソツ

「……………認めてやるよ木場祐斗。テメエには次に戦うときにとびっきりのお返しをして
やる」

「次?僕は今すぐでもいいけど?」

木場祐斗は挑発的な笑いを浮かべた。

……………少し仕返ししようか。

「そおかよ———だったら受けるよ?」

「がッツ———ああ、あああ、ああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!?!?!?!?」

ザマア見ろ!

木場祐斗には魔力を使って悪夢を見せた。さぞ愉快な夢を見ているはずだ。

例えば、今と昔の仲間が殺され続けるとか恨み言を吐かれるとか。まあ、良い。取り敢えず傷は治したしアイツに会いに行くでしょうか。



俺様はアイツ、つーか小猫に会いに来た。

無能姫と共に木場祐斗のもとに向かっていたのだろう。結界で空間転移を封じたからわざわざ走って。

まあ、とにかく挨拶をしようか。そろそろ墮としどころだろうし。

気配を消して小猫だけを拉致った。もちろん結界の中に。

そして拉致ったときの抱き締めた状態で言った。

「やつほー久し振りイ〜会いたかったかなあ?」

ニヤニヤと厭らしい笑みで小猫に話しかけた。

「フリード・セルゼン——ッッ!」

その眼にあるのは『恐怖』——と『欲望』

それを見て俺様は決心した。『ここからじわじわ墮とそう』と。

小猫は俺様から離れようとするが、俺様は耳元でゆっくりとできるだけ優しく小猫に語りかけた。

「いいのか? またあれ^{キス}して欲しいんだろ? 今度はもつとすごいぞ」

「……もつ……と……?」

小猫の目から『恐怖』が消えていく。

「そう。もつとだ」

だんだんと『欲望』に染まり、溜まっていたものも含めて溢れそうになる。

そこを狙って俺様は言った。

「やろうぜ。耐えられないんだろ? 安心しろって、お前のせいじゃない。俺が細工をしたんだ」

もちろん嘘だが。

「……………え?」

熱い吐息と共に疑問に思うような声が出る。

だが、そんな事はどうでもいい。

取り敢えず自分のせいじゃないと思わせられれば良いのだ。そうすれば小猫のような奴の防壁は意図も容易く崩れ去る。

「…仕方…が……ない…?」

「そうだ、仕方がない。俺がそうしたんだから」

「…私じゃ……ない…?」

「お前じゃない。俺がやったんだ」

「…じゃ……あ」

小猫は物欲しそうな目でこちらを見る。

さあ、始めよう。

「ん」

「んっ」

少し近づけただけで小猫が寄って来る。

ここまでメンタル強度低かったのか…

そんな事を思いながら面白いものを使いながら小猫とのキスを始めた。

まずは舌同士を円を描くように動かし、次に上下の歯茎をゆつくりと優しく、そして

稀に激しく舐めまわす。

小猫の口から唾液が溢れてきたら、舌を小猫の口の中に押し込む。

「んっ——むッッ……んッ」

俺の舌が小猫の口の中を食る。激しく責めたりゆっくりと歯の裏側を舐めまわしたり、速度に差をつけながら確かに小猫の弱い部分を責めていた。

「んっ——ちゅっ——れろっ——ふわあ……」

小猫は蕩けた顔をさらにだらしなくしていく。

——そしてそこで止める。

「ぶはっ——ああ……え……?」

なぜ? 続きは? そんな視線を感じるが無視する。

肩を少し強く掴み耳元で話す。

「ああ……」

「小猫、大事な用があるから今日はここまでのな」

「え……」

よおーしここが正念場だ。

ここで自分のことを理由のある悪人だと思わせれば後で失望されるとしても、今の猫の心を掴める。

今、小猫の心を掴めばもう小猫は本当の意味で逃げられなくなる。

もつと真剣な眼差しで前世の規則に縛られていた頃の自分のフリをする。

小猫と間を作り肩をつかんだまま俺は純粹に見える笑顔で言う。
「また、今度な」

ギヤツプ完成。アリーヴェデルチ
さよならだ。

◆◆

さて、あのあとは拠点に戻り一人で小猫がどうなってるかを考えていた。

小猫に使った『面白いもの』は少しあとの戦いで役に立つだろう。それくらいにして
おいたし。

ちなみに『面白いもの』は柔道七段の悪魔が使っていたものだ。……………あれはマジで
化け物だったなあ……………

まあ良いさ、もう少しだ。もう少しで『聖魔剣』が……………いや『聖魔剣』と『小猫』が
手に入る。

「くく……………かか……………やっべえ愉しみすぎて笑えるぞ」

その後、俺様が大笑いしていたらバルパーのおっさんが来て「うるさいわ!!」と怒鳴
りつけられて笑いは止まった。

俺様は聖剣回収に行くんだ……ウレシイナー……

さあさあ今日も夜がやって来ましたア!!

夜と言えば神父狩り! そう、つまりは俺様のターン!

まあ、今日は神父狩りじゃなくって聖剣回収なんだけどねえ。聖剣使いを今日中に倒して聖剣を奪っちゃまうっつーわけでサア。

今は聖剣使いを搜索中でやんす。いやあくどこ捜しても見つからない見つからない。バルパーのおっさんのときと言いましめかして俺様つて人捜しの苦手なんじゃねえ?

「ん……? いや、そんなこともねえか。やっぱり町中跳び回ってれば見つかるよなあ」
俺様が。

「貴様がフリード・セルゼンか」

ゼノヴィアと思われる人間が背後から声を掛けてきた。

「そうそう、正解でサア」

俺様は振り返り腕を広げながら言った。

「俺様こそ、フリード・セル——あつぶねえ!」

突然斬りかかられた。

「外したか……」

いやいやいやいや、違うだろ。

「『外したか……』じゃ、ねえーよ!! 殺す気か!? もつと常識を弁えて行動しろやアツ!!」
「イヤー剣を持つてる人に常識説かれても……ねえ?」

紫藤イリナがそう言った。

………ん?

「俺様つてば剣出してたつけ?」

「え?」

「え?」

「………まあ、いや。とにかく殺し合おうぜえええええ聖剣使いいいいいい!!!」

「え? ちよつ、ま、まつてよお!」

紫藤イリナに斬りかかる。武器聖剣を出していないからか、かなり慌てている。

まあ、関係ねえけど。

「ヒイヒイヒイヒイヒイハアアアアアアアアア——ツツ!!」

「言葉巧みに相手を騙し、隙を作つて殺しに行く。なるほど噂通りの卑怯っぷりだな」

………ええー………今回は偶然だし………てゆーか誤魔化したかっただけだし………

………自分のマヌケっぷりを。

「へ、へへ、そのとーり卑怯卑劣は俺様の十八番ですつてんだあ……?」

「ふん、まあ良いだろう。お前を殺して聖剣を返してもらおう」

「いや、今のは誤魔化しただけなんじゃ……?」

うるせえやいっ!

「おい、こら! そつちの栗色ツインテール! 戦うのか戦わないのかどつちだ!」

「え!? なんで私怒られてるの……?」

「イリナ剣を取れ。相手はあのフリード・セルゼンだぞ。油断して良い相手じゃない」

「え……!? あ、うん……りよ、了解……」

どうやって聖剣を奪うかなあ……

やつぱり手足を斬って生かしておこうか……

それとも因子を奪って放置しようか……

ボコボコにして悪魔に助けられた事実を作ってやろうか……

これは、迷うなあ……

……ん? 別に1つに絞る必要なくね? 全部やりやあいいじゃねえか。

「……うっし、決まりだなあ……」

「……? なにが決まったの?」

紫藤イリナ……栗色ツインテールが聞いてきた。

フツフツフ、答えてやろうじゃねえか！

「いんやねえ、君らの手足を動かないようにしたあと聖剣を使えないようにして、生かしたまま悪魔に送りつけようって決めたんだよお」

ニヤニヤ笑う俺様にクズを見る目のゼノヴィアと気持ち悪いものを見る目の栗色ツインテール。

よっし、頑張りますかー。

「んじゃ、まあ、いっくよー」

「殺してやろう。フリード・セルゼン」

「うわわ、私もなんか言った方がいいの？これ？」

まずは足だな。

俺様は栗色ツインテールの背後に移動する。

「ハロー、えーとイリナちゃん？」

言いながら足の健を切り裂く。

「いっ——ッッ!?!」

栗色ツインテールは涙目で足を押さえている。すぐ来るであろうゼノヴィアに対しての挑発用意は完了した。

あ、それと関係ないけどさ、涙目の美少女って萌えるよね！

「イリナっ!?!」

「遅え、っーか近え」

振り向くゼノヴィアに蹴り一発。五メートルほど吹っ飛ぶゼノヴィア。

すぐさま栗色ツインテールの両腕とツインテールを切り落とす。

アイデンティティー消失ツ!!

「?!!?!」

声が出ないようだ。まあ、それは置いといて。

傷を塞いで――

――俺様のターンだっ!

「なあ、どんな気持ちだよ。あっさり仲間がやられちゃった気分はよお」

「くっ……」

「おっそいなあ」

ニヤニヤしながら聖剣の柄で殴る。

「がっ………ツツ!!」

頭から血を流し、こちらを睨み付けるゼノヴィア。

だが、まだだ! まだ俺様のターンは終わらない!

栗色ツイン………タダの栗色を持ち上げる。

「——っ!」

タダの栗色は涙ながらに反応を示す。

「じゃーん、これ見ろよ。良い顔してるよなあ、そう思わねえ?ゼノヴィアちゃん?」
タダの栗色の頬を舐める。その時に因子を奪う。

「きつさつまああああああ!!」

ゼノヴィアはキレた。うん、まあ、当然だよな。

向かってくるゼノヴィアを——

「てい」

——叩き落とした。

「がっ……ハッ——ツツ!」

「うわあく叩かれて終了かよお。マジかー、イヤーもうちよつと頑張つてほしかったなあー、いや無理強いはしないよおー無理強いはさあ」

「こっ……のお……ツツ!!」

「え?なんだつて?」

言いながらゼノヴィアの頭を踏みつける。嫌な音をたてながらアスファルトにゼノヴィアの顔が埋まった。

あれ?死んでね?これ。いや心臓は動いてるし問題ねーべ。

足を切り落とす。タダの栗色とは違い膝からスッパリと。逆に腕は臆だけを切り裂く。ゼノヴィアの体が痙攣を起こした。

顔が見えないのが悔しいところだ。

そのあとは聖剣を2本回収して、ゼノヴィアから因子を奪って、聖剣使い2人をオカルト研究部の部屋に転送した。

バルパーのおっさんにメールを送る。

『回収完了』つと

ケータイの音が鳴りメールが届く。バルパーのおっさんから、速っ!? と、とにかく内容を見る。

『数』

文量が少ない。いや分かるけどさ、内容。

『2本ありますよ』つと

2秒で返信がきた。速いよおっさん。

『り、よ』

「わかんねーよっ!!」

いや、『り』はきつと『了解』なんだろうけどさ!

でもさ『よ』ってなんだよ! 『よ』って!

「『よ』ってなんだよ!』つと」

メールを返す。返ってきた。今度は4秒で。速いっておっさん。

『よくやった』

「現代っ子かッ!!!」

その日は駒王町に1人の男の声が響いたと言う。



リアスはオカルト研究部の部屋に転送されて来た、聖剣使いの二人を見ていた。しばらくしてリアスが呟きだした。

「……………これはつまりそういうこと、で良いのよね……………」

ふふふ、つと笑いながらリアスは言った。

「宣戦布告ってことで良いのよね?——フリード・セルゼン」

誰もいない部屋でリアスは1人で笑っていた。

「ふふふ、はは、あはははは、ふふふふふ、ハハハハハハ!!」
その日は駒王学園付近に1人の女の笑い声が響いたと言う。

まさかの俺様、大ピンチ!?

今回も夜だよおん。

わーいついに決戦のときだよ！

まあ、暇なんだけどね。敵さんくるまで待機かよ。

聖剣まだかなあ……

俺様はバルパーのおっさんに聞いた。

「おっさんまだできねえの〜?」

「まあ、待てフリード。そんな簡単に出来るものではないのだ。エクスカリバー5本の融合などな」

「ふうん……ま、良いけどさあ。できるだけ速く頼むぜい?」

「わかっている。速く終わらせたいなら今は向こうに行っておけ」

「あいあいさー」

バルパーのおっさんから言われ、俺様はバルパーのおっさんから離れ、コカビーの旦那に挨拶に向かった。

「旦那ア〜!!」

「なんだ、フリード。戦いの前だぞ少しは落ち着いたらどうだ」

「ええー、敵さんまだなのお〜?」

「近づいてきている。もうすぐだよほんの2〜3分だ」

コカビーの旦那が言った。

まあ、それならいいや。待つて――

ゴツツツ!!!

――突如爆音が響いた。

爆音の方向を向くと無能姫とその眷属たちが数百メートル離れた場所にいた。

いや、気にしてる場合じゃないか。とにかく今は向かってくる『滅びの魔力』をどうにかしようか。

「旦那アツ!!」

「わかつている」

コカビーの旦那はこんなときでも冷静だった。極大の『光の槍』で真正面から迎え撃った。

「すげえーな、オイ」

「——いや、まだだよ」

「あ?」

主人公君と木場祐斗が上から落ちてきた。

「会いたかったぜ!フリードオ!!」

主人公君が叫ぶ。

「今度こそ君を殺す」

木場祐斗が静かに宣言する。

「ハッハー、出来もしねえーこと言ってるじゃねえよ。つーかお前にはとびきりの仕返しがまってるんだけど?」

俺様は言う。いつも通りニヤニヤニタニタ気持ち悪い笑みを浮かべながら。

「フリード!!そつちはお前に任せるぞ。こつちはこつちで楽しめそうだ!!」

いつの間に呼び出したのだろうか。ケルベロスがそこにいた。死んでるけど。え……マジ?

「そう言うことらしいから、そつちはよろしくね。イツセー、祐斗——小猫」

小猫の登場である。やっぱり無能姫だわ、あれ。俺様が確実に手を出してる奴をぶつけたア、マヌケが過ぎるだろ。

「へへ、来いよ無能姫の眷属どもオツ——ツ!!」

さあ、戦争の始まりだ。



最初に攻撃してきたのは木場祐斗だった。

俺様は迎え撃った。拳で。

「オラァ—— ツツ!!」

「なんて馬鹿力だ…… ツツ!?!」

拳は魔剣をへし折り木場祐斗に直撃——

「俺もいんだよオツ!!」

—— しなかった。

主人公君が『赤龍帝の籠手』で受け止めた。

そして——

「ドラゴンショットオオオオオオオ!!」

—— 『倍化』されて増幅した魔力とドラゴンの力が放たれた。

「無駄なんだってばよ」

俺様は『ドラゴンショット』を叩き落とす。

「わかってるよ」

主人公君の声がするのと同時に小猫が横から殴ろうとしていた。

ああ、一撃貫つたかもな。そこにいたのが小猫じゃなければ。

「——ツツ!?!」

小猫が驚いている。まあ、当然だよええ。

前に使った『面白いもの』が作用してまずしおすし。

「無理だよおくん。だってほら小猫ちゃんはさあ、『依存性面白のある薬もの』のようなチカラを使われてるからねえ〜」

そう、『面白いもの』とは『とある悪魔』が魔力の才能すべてをかけて作り出した『依存性』を付与する能力である。

この能力の恐ろしいところは3つだろう。

1つ、触れただけで使える

2つ、『依存性』の強弱を操れる

3つ、『依存性』が働くのは能力行使中に『能力を受けた者』が受けたなにかである。

3つ目がマジでヤバイ。これはもう『快樂』に限らず『痛み』でも『絶望感』でも、とにかく普通なら最悪の状態に依存させてしまうのだ。

これのせいで『とある悪魔』と戦った多くの者が『痛み』を求め続けるようになった

「聖劍投げるか普通!?!」

「細かいことは気にせんでいいわツ!!」

「おいおいおいおい、聖劍狂いのおっさんが聖劍投げるとのを細かいこと扱いしちゃつ—

———おとおおう!!?!」

「それを、渡せ———ツツ!!」

木場っち怖いよ!

まあ、いいや!

「やなこつた—」

木場祐斗の腹部を蹴飛ばす。サポートに向かってくる主人公君は小猫の方向に吹っ飛ばす。

「かはつ———ツツ!?!」

「ゴツ———アツ!?!」

「え……—!?!」

3人まとめてぶっ飛んだ。

さあ、バルパーのおっさんのターンだぜ!

「どうだ!これが聖劍エクスカリバーの力だ!あの実験も役には立ったのだ!」

「バ……—ル……—パアアアアアアアアアアツツ!!」

木場祐斗は立ち上がり叫びバルパーのおっさんに突っ込む。

俺様は突っ込む木場祐斗を横から踏みつける。

「がツツ——!?!」

こちらを強く睨んでくる。

「おお、怖い怖い」

バルパーのおっさんがからかうように言った。

「——ぜ——だ……」

「ん? なにか、言ったかね?」

「なぜ彼らは殺されねばならなかったんだ!?!」

木場祐斗は叫ぶ。それに対してバルパーのおっさんはあつさりと答えた。

「邪魔だったからだ」

「なっ!?!」

言い訳の1つもない言い分に木場祐斗は驚いている。

周りもこちらには来ない。話を聞いているのか、隙を伺っているのかはわからないが。

「……そうだな、一から簡単に説明してやろう」

「なに………をツ?」

「そもそも、聖剣を使うためには『因子』が必要だったのだ」

「『因子』？」

「これだ」

そう言つてバルパーのおっさんは『因子の結晶体』を取り出した。

「これは被験者達から抜き取つた『因子』を結晶化させたものだ。この『因子』を『因子』が足りてない者に与えて聖剣使いを生み出すのだ」

バルパーのおっさんが言う。

「つまりは君たちは聖剣使いを生み出すために殺されねばならなかつたんだよ。わかつたかい」

いい笑顔でバルパーのおっさんは木場祐斗に言った。

「そんなものの……ために……？」

「ああ、これは君にとつて形見のようなものにあたるのかな？ならばくれてやろう。よりの質の高い『結晶』を量産できる段階になっているしな」

そう言い捨てて木場祐斗に投げ捨てた。

「………僕なんかよりも夢をもつた子がいた。僕なんかよりも生きたがつていた子もいた。僕なんかよりも生き残るべき子がいた」

涙ながらになにかを誓うように木場祐斗は言う。

「それでも僕が生き残ってしまったのなら、僕が彼らの仇を打とう」

光を放つ。わかりやすい成長の証。

なによりもさつきから『赤き龍』が説明してる。

つまり『聖魔剣』の完成だ。

「バルパー・ガリレイ僕がお前と言う邪悪を討ち滅ぼす」

「やれ、フリード」

「まったく、人をポケモンみたいに言いやがって……」

……………ん?

あれれ? 準備整ったし仕返しできんじゃない。

「おっさん!!」

「なん——」

バルパーのおっさんの首をチョンパしますたあ。

……………え?」

それは誰の声だったろうか。俺様がバルパーのおっさんを殺したことが不思議なんだろう。

まあ、どうでも良いんだけどね♪

「ねえねえ〜木場くうくん、バルパーのおっさん殺せなかつたねえ〜」

「寝んな、起きろ」

腹蹴り一発。木場君起床。

「ぐっうああ」

「おはよーで、どんな気分？復讐相手も『神器』も奪われた木場君。ねえねえ教えてよ木場君つてばあ〜」

超愉悦!!

「——なるほどな、それがお前の力の秘密か」

「んあ？旦那？なんすか、いま超絶いいところなんすけど」

コカビーの旦那が話しかけてきやがった。

無能姫とドS女はボロボロだ。旦那、圧倒的だなあ。

「いや、なに……お前がそっちの悪魔に話しかけるとき、お前から魔力の気配を感じたの
でな」

わーコカビーマジコカビー。

「そうっすかあ」

木場祐斗は……もう、いいや。なんか飽きたし。

「ああー飽きたなあ……」

眩いていると突然、結界が壊れた。

「なっ!? 貴様がなぜここにいる!」

コカビーの旦那が叫ぶ。

やっべ、忘れてた……

「コカビエル貴様を捕らえに来た」

ヴァーリ・ルシファー参戦!!

そして――

「………来たみたいね」

「んあ?」

――無能姫が笑った。なぜに?

「君らだね、リアスをこんなにしたのは」

「これはどうするべきでしょうか……」

サーゼクス・ルシファー参戦!!

グレイファイア・ルキフグス参戦!!

あの女、手段選ばなくなってる!?

あれ? 絶体絶命大ピンチ?

あるえ……?!

俺様能力使いまくりイ!!

—— やつべえよ。どうしよう……これ……

「ガア—— ツツ!？」

「旦那ア!？」

『白龍皇』にコカビーの旦那が瞬殺された。

「……テメエは」

「あ?」

主人公君が話し掛けてきた。いつの間にか小猫は意識を飛ばされたらしい。

サーゼクス・ルシファーとグレイフィア・ルキフグスは動かない。

「木場がどんな思いで『禁手』に至ったと思ってるんだよ……」

「おいおい、マジか……」

主人公君からドラゴンの力を感じる。てゆうか上がってる。あれ、ヤバくね?

「……許さねえぞ、フリーイイイイドオオオオオオオオ!!」

『Welsh dragon Balance Breaker!!!』

「ヤバイかもなあ……」

主人公君覚醒!!

「なんだ、これ……?」

『相棒も至ったのだ。それが『赤龍帝の籠手』の『禁手』、ブリストテッド・ギア・スケイルメイル『赤龍帝の鎧』だ』

主人公君が『禁手』を使えるようになった。

うん、とりあえず2、3人の能力奪っていいのかな……

「さて、君はどうするかね? コカビエルは倒されたが」

サーゼクス・ルシファーが聞いてくる。グレイフィア・ルキフグスは様子を見ている。

まあ、確かに大ピンチだよ? 『最強の魔王』に『最強の女王』、さらには『最強の白龍皇』に『赤龍帝』もいるし?

「でもさあ……それって俺様が負ける理由にはならねえんだよなあ……」

「そうか、なら——」

——死ね。

その一言と共に『滅びの魔力』が飛んでくる。

『ジャッジメントリング大法官の指輪』

左手に顕現した『本』に『吸収』させる。

そしてコカビーの旦那の元、つまり『最強の白龍皇』の元に向かう。

「さあーて! マジでやりますかア!!」

魔力も光力混ぜ合わせて全力で移動した。

「来るか……!!」

『最強の白龍皇』ヴァーリ・ルシファーはそう呟いた。その顔は鎧で見えないが笑っているように感じた。

ゴツツツツ!!!

爆音が鳴り響く。

俺様はコカビーの旦那を奪い取り、その場から離脱する。そして――

「頂きます」

――飲み込んだ。

『吸収』の能力でコカビーの旦那の力を吸収したのだ。

目の前にグレイフィア・ルキフグスが現れた。

「なツツ!?!」

上に逃げようとしたが、上には『滅びの魔力』が漂っていた。

あれ?あれって確か『滅殺ルイン・ザ・エグステインクトの魔弾』じゃないっけ?

やっばい!!

あつさりと『白龍皇の光翼』と『赤龍帝の籠手』を奪い取る。

いままで奪わなかったのは、この能力で奪って神のかけた制限が解けるかわからなかったからだ。

それは置いといて――

「――よっしやあアツ!!ポケ……じゃなくて『白龍皇の光翼』『赤龍帝の籠手』ゲツトだぜ!」

ヴァーリ・ルシファアと主人公君が倒れた。

次イツ!!

眼前に迫るグレイファイア・ルキフグスの拳を喰った。

「ツツ!?!」

慌てて右腕を引くグレイファイア・ルキフグスだが無駄である。もう、左腕を掴んでい
るのだから。

そして――

「ショータイムだ」

「んっむ――!?!」

――キスをする。

小猫との違いは一つ、魔カ能力を奪うためのキスであるということ。

もちろん細工もするが、アジユカ・ベルゼブブあたりなら簡単に解けそうなんだよね
……

ほら所詮魔力の力だし？それなりの魔力の使い手が同じように内側から使えばできるかもしれないなあ、やらせてくれるかはさておいて。

「んっ——ちゅっ——ふあっ——ああ………」

「ぶはあっ」

『最強の魔王』がいるのでやることはすぐに終わらせる。

「——！！！」

空から『最強の魔王』の叫びが聞こえた。

「やっべえ!!」

俺様は急いで逃げようと空を飛ぶ。

だが——

「何処へ行くつもりだ——!!」

——『最強の魔王』は目の前にいた。

「がっ——はアっ——ツッ!？」

ぶん殴られた。俺様は結界を突き破り、駒王町の外までぶっ飛ばされた。



サーゼクス・ルシフ物アアにぶつ飛ばされた後が今である。

「いつてて……」

片腕でガードしたのだが……消し飛んだようだ。

まあ、すぐに生やせるんだけどさ。

「まったたく、これじゃあ腕を交換したようなもんじゃねえか」

俺様はサーゼクス・ルシフアアが殴ってくる寸前に殴ってこない方の腕を奪った。

腕に触れた瞬間に魔力を奪いにいったんだが、奪えたのはせいぜい2く3割つてところだ。

「……………化物が」

久しぶりに使ったなこの言葉。ああホントに割にあつてんのかなあ……………今回の戦いは。

ヴァーリ・ルシフアアと主人公君はどうなるだろうか…………『神器』は奪ったがそれでも生きてそうだよなあ…………メインキャラ的な意味で。

「んで、テメーら誰よ？ポロポロの人が歩いてんだから肩ぐらい貸せてんだ」

「何もない空間から人が出てきた。」

「気づいていたのか……」

「たりめえよ、俺様を誰だと思ってるやがる」

「現れたのは曹操と霧使いだっただけだ。」

「曹操といえば混沌カオス・ブリゲードの渦?とかいう組織の人間だったはずだが……」

「んで、何のようかね聖槍使い。俺様つてば可愛塔城小貓い女の子連れて来れなかったせいでイラついてんだけど……下らない用事だったらぶつ殺すぞ」

「……どこまで知ってる?」

「曹操が言ってきた。俺様は答えてやる。」

「え?なにが?カオスなんちゃらって組織のこと?それとも構成員に旧魔王派とか英雄派とかあること?はたまたオフィスについてとか?」

「……なるほど、どうやら俺は君を少し侮っていたらしい」

「用件話せつて言っただろ。速くしろ」

「曹操は言った。」

「俺達の組織に入ってるほしい。勧誘と言うやつだ」

「オールオツケー」

「早っ!?!」

「え、ダメなの？」

霧使いが驚いたので俺様は曹操に尋ねた。

「いや、問題ない。これからよろしく頼む」

「りよーかいでサア」

さて、早く寝たいので曹操に尋ねた。

「眠いんだけどさ、泊まりオーケーのアジトとか無い？」

「あるにはあるが………悪魔を拐うのではなかったか？」

「あとでいいや。あれはもう呪いみたいなもんだしねえ」

「………まあ、良い。案内しよう、ゲオルグ頼んだ」

「………了解」

霧使いは不服そうに頷いた。

ああ、ねっむいわあく。おやすみい

カオス……なんとかに入ったよ!!

俺様はカオスなんちゃら!

あのあと、俺様は寝ました。寝たんですよ。

いや、ほら昨日はさんざんな目にあつたし。仕方ないよね!

しつかし過剰戦力だったよなあ……個人を殺すためのものじゃねえってあれ。

まあ、それは置いといて奪った能力を試したいなあ……

暴れても問題ない場所あるか聞きに行こうか。

あ、ちなみに『赤い龍』も『白い龍』も眠って貰いました。
ウエルシュドラゴン バニングドラゴン



おつしや、曹操発見だぜえ!

「おーいー!」

曹操が振り向き言った。

「どうしたんだ？」

「暴れられる場所って無いかなあ？特訓場とかさ」

「……………なるほど、昨日の説明をまったく聞いていなかったわけか…………」

曹操は溜め息をつくとき呆れたように俺様に言ってきた。

「君なら見つけられるだろう……………闘技場になっている場所だ」

「りよーかい。あんがとね〜」

俺様はそう言って曹操から離れて、探し始めた。

「みーつけた、っと」

そうして俺様は闘技場に向かうのだった。



「さあ、お試しだけぜ!! 『赤龍帝の籠手』ブラスレット・ギア & 『白龍皇の光翼』デイベイン・デイベイディング!!」

背中に光翼、左手に籠手……………問題なしだな。

次は『騎士ナイトは徒手オプ・オーナーにて死せず』を使って『禁手』を改造する。

「まずは邪魔な鎧を外して、っと」

『禁手』を使うと2つの鎧が混ざったので取っ払う。

てゆうかある程度馴れてないと鎧とか邪魔なだけだし……

「形状は………手甲にしようかな………」

形状を白と赤の2色で構成された手甲に変える。

上腕から手の甲を覆うようにして具現化させる。

いやあく形あるって良いよね!創造系の『神器』だと『騎士は徒手にて死せず』が使えないから困る。

「能力の確認、つと」

『Boost』

『Devide』

「よしオツケー。次は………なんだっけ?」

『覇龍』とかやろうかなあ………あれ?なんか違うな………ああ、そういえば『透過』と『反射』を使えるようにしようとしてたんだった。

完つ全に忘れてたわ……

「こう、して、こうか………?」

改造完了。試してみようぜ!

「そらどうだ!」

『Penetrate』

『Refllect』

「音出たし大丈夫か……？」

だとすると、随分あつさりとできちまったなあ……

それはさておき
閑話休題

「お試し終了。飯食いに行こーかなあ……」

「そう言うなよ、すこし遊ぼうぜ」

英雄派の1人へラクレス登場!!

「かませですね、わかります。」

「誰がかませだア!!」

へラクレスが叫ぶ。

どうでもいいや……

「んで、何して遊ぶのかなあ……まさかこの年で鬼ごつことか言わないよね?」

「へっへ、物わかりは良さそうだな。模擬戦だよ模擬戦をやるーぜ」

「やっぱり、かませだよコイツ」

1人眩いた。

ああ、でも模擬戦かあ……試しがいはあるかなあ……

「イーゼエやろうかア」

「んじゃまあ、いくぜ！」

▽ヘラクレスのこうげき▽

▽俺様は回避した▽

「すう——ふうー」

『『『『Burst!!』』』』』

瞬時に5回分の倍加を済ませて、構える。

少し話が逸れるが俺様は自分が屑なのを自覚している。そんなもって俺様はこう思っている。

——屑で神父なら使えなきやならない技がある!!

その名は——!!

「フツ——ツツ!!」

——マジカル八極拳!!

「ごっはっ——ツツ!?!」

ヘラクレスは闘技場の端まで吹っ飛んだ。

「ああーやっぱり使いづらいなあ〜」

マジカル八極拳は個人的に使いづらいのでネタとしてしか使わないだろう。

「ま、いいや。飯食いにし出掛けよーっと」

そうして俺様は通常の3.2倍の威力の拳をぶつけたヘラクレスを放置して飯を食いにいった。

「……………どうするべきか……………」

どこからか曹操の声が聞こえたと言っておこう。



飯を食って、能力で遊んで、挑んでくるやつぶつ飛ばして、そんなことをやっていたらオーフィスが来た。

「なにようかなあ……………無限のゴスロリ様よお」

「我、オーフィス。無限の龍神」

無限のゴスロリは言ってきた。

「ああ、そう。で、なんのようでござんすかー」

「ん、我が連れてく。グレートレッド食べて」

……………え？今なんて言ったコイツ……………

「も一回言ってもらって良いかー?」

「ん、我が連れてく。グレートレッド食べて」

ハツハツハそんなもんさあ……

「無理に決まってんだろ!」

「……できない?」

「できないとも」

「……無理?」

「無理です」

無限のゴスロリはしょんぼりしていた。

餌付けでもしてみようかなあ……

「落ち込むなよ、これやるから」

そう言っただ俺様は無限のゴスロリに晩飯のカレーをあげてみた。

さあ、どうだ!食いつくか……!!

「ん」

▽無限のゴスロリはカレーを食べた▽

「うまいか?」

「………?」

なぜ首を傾げるんだ……

まあ、いいや。

てか、そろそろ小猫を拐いに行かないとヤバイかもなあ……



夜中に拐いに来ました！

ただ肝心の小猫が……

「んっ——ふっ——はあっ」

ナニカシテル……

まー良い、さっさと拐おうかなあ

「ハロー小猫、拐いに来ましたー」

「ふっ——……ああ……ええ？」

蕩けた顔でこちらを見てくる小猫がよくわかってないらしい。

小猫の背中と膝に手を添えて抱える。お姫様抱っこですよ……わかります？
外に出て目的地までの距離を『半減』する。

さらに『半減』もつと『半減』まだまだア『半減』『半減』『半減』!!

高速移動、到着。

そうして終わる今日だった。

《原作組のその後》

あの後は大変だった。

もしもリアスがフリード達の戦いを眺めていただけだったら、一誠もヴァーリも死んでいただろう。

リアスはあるときアザゼルに急ぎの連絡をしていた。形振り構わず繋がる通信すべて使って。

結果、間に合った。

『神器』を奪われた2人は変わりの『神器』として『トゥウイス・クリティイカル龍の手』を移植され、足りない生命力もアザゼルがなんとかしてみせた。

それにより二人は一命をとりとめた。

だからきつと、重症なのは魔王夫妻の方だろう。

喰われた腕はもとに戻ったが、グレイフィア・ルキフグスは魔力などの悪魔としての力をすべて奪われてしまった。

サーゼクス・ルシファアも力を2〜3割を奪われてしまった。大したこと無いように聞こえるが前魔王の10倍の魔力の2〜3割が奪われたのだ、かなりマズイ。

そんな中、グレイフィア・ルキフグスだけが別の意味での問題を抱えていた。



「んっ——あっ——ふっ——ああ」

小猫がナニカシテル頃グレイフィア・ルキフグスもナニカシテタのだ。

魔王サーゼクスの邪魔はしまいと必死に隠して。

「どうして……!!」

ただひたすら満たされない欲求を抱えながら。



リアスは頭を抱えていた。

最強の魔王サーゼクス自分の兄に攻撃されながら反撃できる程にフリード・セルゼンは強かったのか……そ

んな思いでいたのだ。

町は救われたがもっと重大な何かを見落としている、そんな気がするのだ。

今回の一件ではリアスも木場祐斗もせっかく『知恵』を磨いていたのに怒りの的敵が来るとどうしても感情的になってしまうことが問題だろう。

リアスは考えた。

最強最強兄では仕留めきれず、自分達では届かない。

ならば、強くなるしかない。だが、そんなことできるのか？

祐斗は『魔剣』を創れない。

イツセーは『神滅具』を奪われた。

小猫はフリードに壊された。

朱乃は光の力を使いたがらない。

アーシアはそもそも戦闘用員では無い。

……自分しかない……サーゼクス最強の妹である自分しか。

「やってやるわよ……私がフリードを殺す……!!」

俺様は会談を見ている。

あの後には小猫と一緒に楽しみを、てか小猫を堪能しましたあ。

愉しかったなあ……特に小猫が涙目で顔を緩めているのはサイコーだったぜ！

それはさておき
閑話休題

朝になって小猫と共に『英雄派』のアジトに戻った。

すると曹操のヤローが「会議がある」とか顔をひきつらせながら言つて来やがったもんだから参加したんだが……

「……………なんでこおーなんのかなあ……………」

「そう言うな。お前の派閥が出来れば好きな戦力を入れられるぞ？」

『英雄派』の幹部会議かと思つたら『渦の団』の派閥トップの会議だった……

……………なんか詐欺にあつた気分だよ……………いや俺様は詐欺する側なんだけどさあ……………

つーか、問題はよお……………

「勧誘してきた奴が派閥作れたア随分じゃねえか。戦力がいるんじゃなかったのかよ

？」

曹操の提案で俺様の派閥出来ちゃったことだよ。

どうすりゃいいんだよ……

「ハハハ、必要なときに手を貸して貰えればいいさ」

このヤロー制御できないからって遠ざけやがったな……

まあ、いいや、考えててもしやーない。

次だ次！

確かストーリー的には『悪魔』・『天使』・『堕天使』のトップ達が集まって会談を開くはずだ。

つつてもグレイフィア・ルキフグスは悪魔の力を奪われてるし、主人公君とヴァーリ・ルシファーは生きていても『赤龍帝』でも『白龍皇』でもないんだよなあ……

タダの栗色（イリナ）とゼノヴィアは因子と聖剣奪ったし……いや、ゼノヴィアはワ
ンチャンあるのかな？ デュランダルも奪つときや良かったわ。

あれ？ でも、因子をまた入れれば聖剣使いにはなれんのかな？

ま、いいや。

とにかく今は、目の前の黒猫の相手をしよう。

「俺様への客かなア？着物を着崩してる猫の姉ちゃんよお？」

目の前の黒猫に尋ねる。

「そうよ。聞きたいことがあるの、良い？」

「あつははー頷かなくても聞くでしょ、あんた」

曹操はいつの間にかいなくなっていた。

マジ腹立つなアイツ……

そんなことを考えてると黒猫は「そうね」と言い、俺様へ質問を投げ掛けてきた。

「ねえ、なんでアンタから白音の匂いがするの？」

鋭い目付きで殺気だつてこちらを睨み付けていた。

俺様は出来るだけニヤリと笑い、顎を突き出し見下すように言った。

「ヤったから、だけど？」

言った直後、黒猫……黒歌の背後に陣が浮き出た。

「死ね」

黒歌が言い陣から攻撃が――

「断る」

――出てこなかった。

ていうか俺様がぶっ壊した。さあ、アツパーだ！

「はい、アツパー！」

「ガッツ!?!」

意識を飛ばして持ち帰る。

てゆーかさ、騾のなつてない動物はきちんと騾るべきだと思ふんですね。個人的に。



『英雄派』のアジトから出ていき普通にアパートを買った。

え？金？はっはー……言わなくても、わかるだろ？

黒歌をベットに置いて小猫と話を始めた。

「小猫、テメーの姉ちゃん俺様に攻撃してきたんだよ」

「……………え？」

なぜ？って感じだなあ……………あれ？小猫って姉にトラウマあったんじゃないっけ？

あ、どうでもいいですかそうですか……………

じゃなくて！

「えー、だから今晚は小猫の姉の黒歌を騾ま……………調きよ……………お仕置きしましょう、ね

？」

「はい……」

目の光が消えているようにも見える小猫は従順だ。うん！良い仲間ペットだね！

さて、それじゃあ今日はこれで終わりだね！

夜が楽しみだわあ……



ドーモ、時間は飛びました。キンクリだよ、キンクリ。

今日はね、『旧魔王派』が頑張る日です。わかるよね？会談の日だよ！

よかつたあゝ会談が無くなったらどうしようかと思つたわ。

まつたく何日たつたと思つてんだよ！……………あれ？何日だっけ？

まあ、いいや。

とにかく、『旧魔王派』が頑張るから俺様たちも観察しようぜ！って感じだよ。

……………まあ、隙あらば男も女も喰つちやおうかなとか思つてるし？あ、もちろん男は物理的に女は性的ですよ？

「……………会談、始まりますよ？」

おおつと、もうそんな時間かあゝ

相変わらずハイライト無しの小猫と呼ばれた。

てゆーか小猫はどんな気持ちで行くんだろうか。

よし！聞いてみよう！

「小猫はさあ……………」

「……………？なんですか？」

小猫の肩を寄せ耳元で囁くように聞いた。

「かつての仲間たちにどんな顔で会いに行くのかなあ？」

「……………？今の私はあなたの仲間ペットというだけです……………」

うん、まあ、壊れてるよね。つまんないなあ……………」

質問を変えようか……………」

「……………」じゃあ、実の姉をメチャクチャにした時はどんな気分だった？」

小猫は頬を紅く染め、ハイライトのない目でにやけながら言った。

「……………」すつつつごく、楽しかったです……………!!」

どうやらあれはおお仕置き気に召したようだ。

よかったよかった。

閑話休題

時間になったし会談を見てようかね。



「さて、会談を始めようか」

サーゼクスの言葉で会談が始まった。

会談の場に本来いるはずのグレイフィア・ルキフグスはいないが他はそろっていた。リアスが事件の説明をした。

「以上になります」

間違いはないとソーナが言った。

和平の話もあっさり終わる。

そして話は原作とは別の方向に進む。

「——ミカエルとアザゼルにはフリード・セルゼンについて話してもらおうか」

サーゼクスが言った。奴は何者だ、そういう意味が込められていた。

ミカエルとアザゼルの答えは一緒だった。

「……わかりません」

「…………わからねえ」

「……なんだと？」

サーゼクスは眉をひそめて苛立ちを隠そうともせずと言った。

「そちらの人間だろう……!!」

アザゼルが慌てて言った。

「いやいやーマジなんだよ！フリード・セルゼンに関しては快樂殺人者くらいしかわかんねーんだってば！」

ミカエルも続いた。

「アザゼルの言った通りです。天才として知られてはいましたが、殺人への快樂を見出だしたことで異端とされました」

「天才……………だと……………」

フリード・セルゼンはその程度^{天才}では収まらないナニカだったハズだ、とサーゼクスは思った。

ある意味ではフリード・セルゼンは天才で合っているのだが、『天^神から才能^{異能}を貰った者』という意味で。

「フリード・セルゼンについて——」

——分かることは無いと？とサーゼクスが聞こうとしたとき

——時間が停止した。

「!？」

驚いたのは誰だったか。

アザゼルが言った。

「おいおい、このタイミングで襲撃かよ……………」

サーゼクスが状況の整理をしていた。

「……これはリアスの眷属神器のものだ。停止から逃れられたのは実力者だけと考えて良いだろう」

時が止まっていない者は各勢力トップを除くと

『聖劍使い』ゼノヴィア

『元白龍皇』ヴァーリ・ルシファー

『紅髪の滅殺姫』リアス・グレモリー

だけである。

「お兄様、ギヤスパーは私がなんとかします。お兄様達は表の連中の掃除をお願いします」

リアスが名乗り出た。それにゼノヴィアが突っ込む。

「……一人でできるのか？」

「あら、心配してくれるの？なら、一緒にどう？……『元白龍皇』のあなたもよ。あれフリードの被害者だし、鬱憤が溜まってるでしょう？」

ヴァーリは答えた。

「……そうだな、俺もムシャクシャしてたところだ。手を貸そう」

ゼノヴィアが溜め息をつき言った。

「なら、私が行かないわけにはいかないな」

サーゼクス、アザゼル、ミカエルの3人はなぜかこの3人に頼もしさを感じていた。
なにか、精神的な変化があったのか……

そんなことを思いサーゼクスは決定を促す。

「では、表の連中は私達が、リアスの眷属はリアスとヴァーリとゼノヴィアの3人でやる
という事で良いかな？」

全員が頷いた。

やっと俺様の出番だよ！

——リアス・グレモリー
無能姫達は凄まじかった。

リアスが魔力で消滅させて、ヴァーリが魔力で吹き飛ばし、ゼノヴィアが一振りで作る。

そんな感じで旧校舎に徒歩で向かう3人は現れる敵を瞬殺し続けている。

あれ？無能姫っていったい……あるええ？

まあ、良いか……俺様がやることは変わらないし。

あ、襲撃組が全滅した。早っ!?

ま、まあ襲撃組が全滅したし、俺様もそろそろ出るかね。

そんなことを考えながら俺様は空から落下する。

「さあ、とうとう出番だ『ネタパランス・ブレイカー 禁手』その1っ!!」

『騎士は徒手にて死せず』の応用で作り出した『ネタ禁手』

前々から『赤龍帝の籠手』を手に入れたらやろうと思っていた能力^技。

俺様の右腕に『神器』が顕現し、背中からは三枚の赤い羽根が生える。

そして俺様はあの技を放つ。

背中から生える三枚の赤い羽根状炸薬を一枚ずつ推進力として爆発させて高速で敵に突進、強烈な全力パンチをブチこむ、あの技を!!

その名は——!

「衝撃のオ——ファーストブリットオオオオオオオ!!」

ゴツツツツ
!!!!!!

三大勢力トップ達の立つ場所の真ん中に爆音とともに到着。

「これがつー男のロマンだア!!」

馬鹿デカいクレーターの真ん中で俺様は叫ぶ。

………返事がない、ただのしかばねのよ——あるえ?

誰からも返事がないので周りを見渡すとサーゼクスを除いた三大勢力のトップ達はボロボロになって倒れていた。

無論サーゼクスも重傷と言える状態だが。

「あ、サーゼクスちん起きてんじゃん!なんだよもお返事くらいしろよなあ」

白々しく俺様は言った。

「……………!!」

サーゼクスは魔力を放ちながら、こちらを強く睨み付けていた。



場所は変わってリアス達。

「——もう、終わりなのね……」

「そのようだな」

リアスとヴァーリはギヤスパアの元に辿り着くとつまらなそうに呟いた。

「なっ!?! 貴様達は——!?!」

魔術師の言葉が終わる前にリアスとヴァーリは魔力を放つ。

こうしてギヤスパアの暴走を止めたりアス達は一度落ち着き話し合いを始めた。

「さて、どうしましょうか」

リアスは2人にこのあとどうするかを聞いた。

「外に行つて俺も暴れるさ。………出番があればな」

「私も外に行こうと思う」

「そう……なら私も行こうかし——」

ゴツツツツ
!!!!!!

リアスが何かを言おうとすると突如爆音が聞こえ地が揺れた。

リアスは旧校舎の天井をぶち抜き外に出た。続いてヴァーリとゼノヴィアも外に向かう。

彼等が外に辿り着いたとき目にしたのは——

「ん？おやおやおやあ？これはこれは俺様に能力奪^カわれた情けない方々じゃあアないですかア！」

——フリード・セルゼンとボロボロの姿で地に伏していた三大勢力トップ達だった。



……
 後ろから誰か来たので振り向いた。そこには無能姫たちがいた。どうするかなあ

① 挑発

② 挨拶

③ 喧嘩

よし、全部だな。

「ん？おやおやおやあ？これはこれは俺様に能力奪われた情けない方々じゃあアないですかア！」

「貴様ツツ!!」

「——待ちなさい」

ヴァーリが突っ込もうとしたが無能姫に止められる。

「……………なら、どうする？なにか案があるのか？」

ヴァーリはキレル寸前で止まり、無能姫に尋ねた。

尋ねられた無能姫は指示を出し始めた。

「ゼノヴィアはアーシアを連れてきてトップ達の傷を治して貰える？ヴァーリは私と一緒にあれの相手。……………言っておくけど足止めよ？今の私達では勝てないわ」

どうしよう……………無能姫が無能姫やってないよ…………

まあ、いいや。

とにかく今はロマンのために暴れよう。

「ハッ、頼まれりやあトツプ達の傷を治すまで待つてやつてもいいぜえ?」

「なら、お願いしようかしら。待つてもらえない?」

まさかの即答。あれ?プライドはどうしたの!?

「お、おう……」

待つことになりました。自業自得だけどね!



「よし、終わったなあ」

三大勢力組の傷は治り、ソーナ・シトリー含め全員が外に集合していた。

「解せねえ—— なっ!?!」

アザゼルが何かを言おうとしたところを殴りかかった。簡単に回避された。

「マジモン『バランステック禁手化』ウ!!」

両腕に白と赤の手甲が顕現する。

一誠：余波で気絶。

朱乃：体力消耗。

アーシア：余波で気絶。

ギヤスパー：余波で気絶。

ソーナ：体力消耗。

椿姫：体力消耗。

▽墮天使組▽

アザゼル：被弾。重傷。

ヴァーリ：無傷。

▽天使組▽

ミカエル：右腕破損。

ゼノヴィア：体力消耗。

イリナ：余波で気絶。

守られて無傷の者もいるがほとんどが片付いた。

「ハッハー、まだ生きてるのもいるし続けよおぜえ？」

「くっ………!!」

サーゼクスが膝をつく。

さて、どうするか。男はともかく女は殺すのもつたいねえし……とはいえ、誘拐するのも術に嵌めるのも最近やったばっかだしなあ……

「喰らえ」

「喰らいなさい」

ヴァーリとリアスが飛ばしてきた魔力弾をそのまま相手に返す。

『リフレクト Reflect』

「がっ——!!？」

「ツツ——!!？」

返されることを予想していなかったのか直撃して吹っ飛んだ。

うーん……ま、今まで通りでいいか。

セラフオール・レヴィアタンかソーナ・シトリーか……よし、セラフオールにしよ
う。

「無駄なのになあ……」

飛んでくる攻撃をすべて『反射』してセラフオールに近づいた。

「お姉様!!」

「くっ……!!」

ソーナが叫びセラフオールが顔を歪める。

そして俺様はセラフオルーにキスをした。

「むっ———!?!」

セラフオルーの口を塞ぎ、『赤龍帝からの贈り物』を使う。

「んんっ———んっ———ふっ、むうっ———ちゅっ———れろっ———んうっ」

セラフオルーの舌に吸いつき、舌どうしを絡ませる。最初だけはセラフオルーも抗おうとするので押さえる。

セラフオルーの顔が蕩けてきたら口の中を攻め込む。

「んっ———んんっ———べちやつ———れろっ———ちゅぱっ———ん
ん———!!」

セラフオルーは顔を蕩けさせ涙を流し、口と口の間からよだれを垂らす。

「ちゅぱっ———んはっ———れろっ———ちゅぶっ———んっ?———んっ
くっ、んっくっ———ぷはあっ………あああ………」

途中でセラフオルーに俺様の唾液を流し込んだ。

セラフオルーが「はあっ………はあっ………はあっ………!」と息を荒くさせて倒れ込みかけたところを抱き止めて耳にしゃぶりつく。

耳を舐め回し、吸いつき、耳の中に舌を入れる。

「あっ………ああ………!!あああっ………!!!」

セラフオールにはいつものものを弱めに使っておく。

今度こそセラフオールを離す。するとセラフオールは限界だったのかその場に崩れ落ちた。

間。

「……………え？」

それは誰の言葉だったのか……少なくともサーゼクスじゃないだろう。

用事は済んだ。やりたいこともやった。あとは………サーゼクスからもう少し力を貰うか……

「さあて、とっ」

サーゼクスの元に向かおうとすると動ける者が全員で身構える。

どうでもいいや。

「ガツツァ——ツツ!!」

一瞬でサーゼクスから力を奪う。立場逆転的な意味で俺様とサーゼクスの力の対比を8:2にした。

「んじや、バイビー」

残った奴等に手を振って、そのまま放置で俺様は自宅へ戻る。



「いやあく小猫のこと忘れてたわ！アハハ！」

小猫を連れていき忘れて楽しんでしまった。

「いえ、別に問題ないです……」

問題ないらしい。

じゃあまあ、やることやらないとかなあ……

「んじやあ小猫よお、俺様はお出掛掛けすつから黒歌で遊遊んでいいよー」

「ほんとですかっ……！」

小猫の目がキラキラと輝いた。

「んじやま、いつてきまー」

そうして俺様は放置しっぱなしの元最強グレイファイアルキファクスの女王を拐拐いに行くのだった……

俺様とオツチャンと／フリードの被害者達

昨日はあの後、予定通りグレイファイアを誘拐して楽しんだ。

その際、『真つ白な部屋』の監視カメラで撮影した映像はきちんと魔王サマサーゼクスにリボンつきの箱で送りつけた。

そして現在は――

「んーこうかなあ……」

――リビングにて『神セイクリッド・ギア器』に改造などを施して小猫たちにつける予定の『首輪』

作りだしていた。

横にいる小猫で試すか……

「小猫ちよつと試してくんね？」

「わかりました……」

小猫はそう言うと『首輪』を装着して貰おうと上を向き首を近づけてきた。

「ん……と、これで良いんですか……?」

小猫に『首輪』を装着する。

さて、実験だ。

「んじゃ小猫、俺様の右手を思いつきり殴ってくれ」

「……………え？あ、はい……………！」

小猫は「何を言っているんだ？」とでも言いたげな顔だった。

小猫は構えて、俺様の右手を殴——

「は……………？え？ふ、フリード様……………！力がつ……………！」

———
れなかった。それどころか小猫の力がみるみるうちに減っていく。

「よつし成功だな」

『首輪』には『白龍皇の光翼』を混ぜ込んであり、装着している者のどんな理由であれ俺様を攻撃しようとする心に反応して力を『半減』し続ける。

「んじゃあ小猫はその『首輪』付けっぱなしな？」

そう言つて俺様は『首輪』を黒歌とグレイフィアにも装着させたのだった。



特になんの問題もなく次の日になった。

変わったことと言えばグレイフィアが俺様のメイドとして活動を始めたことだ。

「——フリード様、お茶のお代わりはいかがですか？」

このように欲しいときに声をかけてくる凄腕メイドのグレイファイアだが………やばい！俺様、墮落しちゃうよ！え？いまさら？そう言わないで！

それと『ネタ禁手』の開発は順調に進んでいた。カズマの『シエルブリット』だけではなくクーガー兄貴の『ラディカル・グッドスピード脚部限定』や『フォトンブリッツ』なども出来ている。

フハハハハハッ!!

しかし、どれだけ心地良くても今日は大事な用事があるので曹操のもとに向かう俺様だった。



「——て、わけでき。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーがどこにいるか分からねえ？」

「おつ、前なあ………！何が『て、わけで』だ！こっちは結構大変なんだぞ!?魔王の一人にディープリキスかました馬鹿のせいだな!!」

突然だが、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーに会いに行くのはわりと重要なことなのである。

なぜかと言われれば、俺様の目的の一つはリゼヴィムに魔王になつてもらい悪魔を煽り戦争を始めて、そのまま三大勢力に死にまくって欲しいからだ。

あ、ちなみに俺様が自分で殺さない理由はそっちの方が嬉しいからです。

そんな事を考えているとリゼヴィム達がいると言われた場所についた。

「ハロ、フリード・セルゼン君だねい？」

突然の声に少しだけ驚いたがなんか軽いのでこちらも軽く返す。

「イエース！俺様こそがフリード・セルゼンでやんすよ！んで、そう言うあんたはリゼヴィム・リヴァン・ルシファーかい？」

俺様が聞くとリゼヴィムは役者のように動きをつけながら言った。

「そだよ、僕ちゃんがリゼヴィムで間違いねえーぜ！いやあく話しは聞いてるよ。サーゼクスちんの妹ちゃんの眷属を奪ったり、セラフォルーちゃんに公開ディープキスしたり、サーゼクスちんの奥さん奪ったりとやりたい放題だそうじゃないか！」

リゼヴィムが言い終わると俺様とリゼヴィムの間には沈黙が続き――

――がしっ！

二人で手を掴み合い笑った。

「はははっ！、いやあく良い酒飲もうぜ！」

「クククツ……！そうだな、そうしよう！」

そんなこんなでリゼヴィムと酒を飲むことになった。

ちなみにこの後、リゼヴィムのことをリゼヴィムのオツチャンと呼ぶようになった。

《フリードの被害者達》

リアス・グレモリーは今日も『滅びの魔力』を鍛えていた。

「——ふうっ」

魔力が切れたリアスは休憩することにした。

現在、リアスは悩んでいた。

何を、と聞かれればフリードについてだ。

フリードは自分が思っていたのと同じくらい強かった。

だからこそ悩んでいるのだ。どうやってあの強さに追い付くのかを。

「——フリードは間違いなく最強クラス……その上、力を奪う能力があつて『赤龍帝の籠手』もある……さらにはお兄様たちから奪った力……鬱だわ……」

リアスは「はあ……」と溜め息をつくとき、本格的に考えなくてはいけないと思つた。

——フリード・セルゼンを倒す方法を。

自分がフリードを憎く思っているからではなく、フリード・セルゼンという男が軽い気持ちで世界を壊してしまいそうだからである。

兄に頼んでどうにか他の神話の勢力に協力を依頼したい。最低でも主神クラスが何人も必要だ。

「いえ、そこは問題じゃないわ……」

リアスは思考を切り替える。なぜなら協力してもらうことなど前提条件に過ぎないからだ。

見栄をはったり、ヘタなプライドを持っていると真つ先にフリードに力を奪われるだろう。

だから、協力してもらうのは前提条件。

問題は——

「——各勢力のトップが力を合わせてフリードを殺せるかどうか、ね……」

そこが問題だった。

例えばの話し、サーゼクスが全勢力を敵に回したとして勝てるだろうか？答えは否だ。

勝てる訳がないだろう、なぜならサーゼクスよりも強い奴は世界に少なからずいるから。

だが、例えばサーゼクスの力が前魔王の10倍ではなく10億倍だったらどうだろうか？

10億倍ではなく10兆倍だったら？

勝てるかもしれない。いや、勝てるだろう。

全勢力を敵に回すと言うことは世界を敵に回すことなのだから世界を壊して良いわけだ。

なら、勝てるだろう。

前魔王の10倍で世界に影響を与えてしまうのだから、10億倍とか10兆倍なら絶対勝てる。

そして、最悪なことにフリードにはそれができる。

「ああ、もう……どうすればいいのよ……」

協力してもらうのは簡単だ。

フリードの人となりと危険性を教えれば良い。

でも、束になって勝てなかったら？

なにもできない。どうしようもない。すべてが無駄だ無意味だ無価値だ。悩むリアスは電波を受信した。

『量が質を圧するなどと言った覚えはない』

「……………」

無言のリアス。

「…………ダメね…………さすがに疲れてるのかしら…………」

自分の状態に不安を感じていた。



ヴァーリ・ルシファーは今までにないほど『努力』していた。

「はあつはあつ……………くっ……………！」

アザゼルはそんなヴァーリに声をかけた。

「ヴァーリ……………焦るのは分かるが無理すんなよ」

「アザゼル……………」

ヴァーリがアザゼルに向き言った。

「ダメだ……こんなものでは届かない……！もつと……！もつとだつ……！」

「ヴァーリ……無理は、すんなよ……無理だけはな……」

アザゼルがヴァーリの頭撫でた。

なんてことはない、親と子の光景がそこにはあった。



サーゼクス・ルシファーは己の無力に苛立っていた。

「クソツ……!!」

力を奪われ、妻を奪われ、さらには四大魔王の仲間までもが奪われかけている。

「ふざっつ、けるなっ!!」

サーゼクスは他勢力に協力要請できるほど冷静ではいらなかった。



セラフオルー・レヴィアタンはブーツとしていた。

「キス……されちやったなあ……………」

女としてわりと大切なものが奪われたハズなのに不思議と悲しくも悔しくも——
まあ、フリードの能力の影響だがセラフオルーは知らない——無かった。

「なんで、だろ……………」

セラフオルーはわけがわからなかった。

フリードはクズで敵だ。惚れる要素は一切ないハズなのにキスをされたり耳を舐められて自分は喜んでいゝ、なぜだ？

セラフオルーは「フリードはなぜ自分にキスをしたのか？」という疑問を抱えていた。

「なんで…………力奪わなかったんだろ……………」

そう力を奪われていないのだ。かといって自分に異常は——気づかない程度にさ
れているだけだが——無い。

なら、なぜキスをしたのか。なんの意味があつたのか。

顔をほんのり紅く染めてセラフオルーは考えていた。

「…………恋…………う…………まさか…………!?!」

セラフオルーは「恋なハズがない。あんな男に自分は惚れない」そうやって自分に言

い聞かせていた。

グレイフィア達のことも忘れて。



紫藤イリナは怯えていた。

「……………ツツ!!」

聖剣の一件は上から許しが出たので良かったが、フリードに刻まれた痛みはトラウマになっていた。

「うううううううううううう……………!!」

今までのフリードを見てきてイリナは考えた。

自分も拐われるのではないかと。

イリナは性的な被害を受けていない、だから余計に気になるのだ。絶好のチャンスでイリナ達はなにもされなかった。

だからこそ、これから来るのではないかという恐怖があった。

イリナは拐われたらなにをされるかを考えてしまった。

きっと女としても人としてもあらゆる尊厳を奪われるのだろう。オモチヤのようにされてしまうのだろう。

そんな、あながち間違つてないことを考えてしまった。

余計に恐怖が増した。

イリナは怯える。今日も明日も明後日も。

俺様の作戦は順調？／原作主人公：兵藤一誠

あの後、リゼヴィムのおっちゃん和酒を飲み交わしながら、サーゼクスの現状についてやグレイフィアについてなど色々と趣味の話をしていた。

話の途中に「僕のだぞっ！」と登場したユー……………グレイフィアの弟を酔った勢いでぶっ飛ばしてしまったが、まあ問題ないらしい。

他にもリゼヴィムのおっちゃんの許に來た理由であった『リゼヴィムを魔王にしよう作戦』の件も話した。

思っていたよりも、あっさり協力して貰えることになった。

どうやらリゼヴィムのおっちゃんも最古？原初？の悪魔が死んでいく様を眺めたいらしい。

しかし俺様は考えた「リゼヴィムのおっちゃんを魔王にするためにはどうすればいいだろう……………」と。

答えは簡単だった。

やられっぱなしの魔王に不満はあるだろうから正当な手段である民主投票で決めてもらおう。

まあ、そうは言っても『やられつぱなしの魔王』なんて情報を民に与えているか疑問なので曹操たちを使って手柄を増やそうと思う。

確か悪魔たちが『英雄派』にボコボコにされていたのが原作にあったはずだ。そのの時期を早めればいい。

「作戦けつていく、あー頭いてえなあ……」

俺様つてばテンション上がりすぎて酒を飲んだんだけどよおく俺様つてさ酔うと「ヤケ酒かつ！」つて位飲んじやうんだよねえ勢いで。

まあ、ようするに今の俺様は二日酔いだ。

デイベイン・デイベインク
『白龍皇の光翼』つと……」

『半減』能力の応用だぜ！『半減』『半減』ンウ〜!!
最初からやつときや良かった……」

それはさておき
閑話休題。

『英雄派』に作戦を実行させるには曹操に提案しておくのが良いだろう。

「俺が何をしようとしているかお前にわかるかあ〜……曹操よお」

もし、曹操が気づかなければ楽しい祭りになるだろう。

「んじゃ、まあ、行きますかねい……」

立ち上がり、外に出て移動開始！

関係ないんだけどさ『白龍皇の光翼』って移動がかなり楽になるよね！



曹操君に作戦の提案しに行ったら、案を伝えた瞬間蹴り出された。

………何故だ!?俺様なんか悪いことしたのかよ!!あ、しまくってますわ。

まあ、いいや。

伝えるべきことは伝えたし、『英雄派』の動き見ながら決めていこう。

それはそれとして、今は目の前のゴスロリどうにかしよう。

「フリード……グレートレッド食——」

「断るー!」

まだ諦めてなかったんかい!

ま、いいや。さあ餌付けだ、餌付け。

「ま、そんな事よりラーメン食いに行こーぜ。グレートレッドよりは旨そうだしさ」

「ん、わかった……」

そうして俺様達はラーメン屋へ向かった。

今日は特になんもなかったなあ……

あれ？今日つてもしかしてオーフィスとラーメン屋に行っただけじゃね？

ああ、ヒヤッハーしたいなあ……

《原作主人公：兵藤一誠》

兵藤一誠について少しだけ語ろう。

兵藤一誠はライザーとの一戦で強くなったハズだった。

だが、いざフリード・セルゼンと戦ってみれば『神器』を奪われる大失態。

才能の無い一誠が強くなるためのものは無くなり、あまつさえ敵の手に渡ってしまった。

その上、元々壊されかけていた小猫が拐われた。

『赤龍帝の籠手』を奪われ、木場の想いを踏みにじられ、さらに小猫を拐われた。

どうしようもない状況でそれでも尚、一誠は諦めなかった。

強くなるための方法など知らない一誠は、がむしゃらにいつものトレーニングをいつもよりやった。

トレーニング内容は単純でありきたりなものばかりだったが、一つだけ特別なトレーニングがあった。

それは『神器』に想いを注ぐことである。

『神器』は所有者の成長と共に進化していき、所有者の想い・願いが劇的な変化を遂げた時、『禁手』へと昇華するものだ。

つまりは『神器』の成長のための行動である。

普通の人間やただの人外がやったところで意味を成さないであろうトレーニングだ。だが、忘れてはならない、彼が原作主人公であるということ。

彼こそが主人公、運命に愛された者。さらに言うなら選ばれし者だ。

たとえ一本来の主人公誠転生チートがフリードにボコられようと主人公ご都合主義の塊としての運命転生チートオリジナル主人公はフリードに關係

ないところなら十全に発揮される。

悔つてはいけない、彼こそが原作主人公なのだから。



フリードという男が駒王町にやって来てから駒王学園の空気は最悪だった、少なくとも今までは悪かっただろう。

学園一の有名人たちが一斉に変化したのだ。

リアス・グレモリーはどこか、落ち着きすぎていた。

姫島朱乃はリアスに付きつきりになっていた。

木場祐斗は一時期、優しさが無くなっていた。

塔城小猫は突然、転校した

兵藤一誠は現在進行形でエロいことへの興味が薄れている。

良いことに思える内容もあるが、全員同時期に変化したのがハッキリ言つて異常だったのだ。

一誠を支ようとした者達はいた。

アーシア・アルジェントや変態三人組の二人などだ。

しかし一誠はそんな事は気にもとめずに力を求めた。

今も一誠は人目のつかない場所でもいつも通りに特訓していた。

「はあっはあっはあっ……………！」

一誠の特訓の成果はあつた。

まず『禁手』に至り、さらに悪魔の駒の封印を解けるレベルまで強くなった。

短期間の特訓での成果として見れば凄まじいものだろう。

「足りねえ……………!!こんなんじゃない……………あのフリードクッソ野郎にはとどかねえ……………ツツ！」

だが、足りない。フリード転生チー・セルゼントを倒すために必要な力にはまるで届いていない。

「どうすりゃいいんだよ……………ツツ!!」

だから一誠はさらに力を求める。



一誠が苦悩している時、魔王は動き出していた。

「……………サーゼクス、本気か？」

アジュカ・ベルゼブブは友人からの頼みを受けていた。

「ああ、本気だ」

問われたサーゼクス・ルシファーは答えた。

サーゼクスは続けて言った。

「これから、戦争が起きるだろう……………そこにはフリード・セルゼンもいる。であれば、力は必要だ」

アジュカもサーゼクスが力を奪われたのは知っている。

だからこそ、彼の頼みを受け入れた。

「……………わかった、できる限り用意しよう……………王の駒を」

そうして二人の魔王は動いていた。

俺様はベリアルっちとお友達っ！（出番があるとはry）
／H＋ERROの姿は……

「——と言うわけでえ……ええー、今日から仲間になったクリストファー・ベリアル君ですっ！」

「いや誰だよ、そいつは……」

新たな仲間を曹操っちに教えたのだがどうやら不評らしい……何故だっ!?

「何故かって？それはな？俺の前にいるのが【皇帝】ダイハウザー・ベリアルに見えるからだよツツ!!」

「ああ……そうだ、な。私はダイハウザーであってクリストファーではない……」

「あれ曹操っちが思考読んだのは完全スルーですかい？ティハ……？は……？は……？は……？は……？は……？ま、いや。ベリアルっち」

「なんだろう……？俺様の思考読むのはデフォルトなの？って感じにスルーされた……ひでえ」

「つーか、男の名前とかマジでどうでもいいや。まあ女も特に気にしねえけど……問題ないよね！」

「ああーもういい……取り敢えずあれだ。何でそうなったかだけ簡潔に報告しろチクシヨウ……!!」

「顔色が悪い、腹部を押さえて蹲りそう……曹操っちが辛そうだ、簡潔に報告しなければ……!!」

……いや冗談抜きで。狂戦士曹操はギャグ補正がヒドイし、ほら一応曹操っちの体の不調の大半って俺様だし？俺様が気を使ってやらねえとなあ？なあ？

「……おい、そのニヤケ面やめてさっさと報告をしろ。俺は忙しいんだドツカノダレカノセイデナ？」

「へいっ！怒っちゃやーよ、曹操っちい？まあ簡潔に言うと、だ。オーフィスとおつちちゃん、あたりゼヴィムのおつちちゃんね？の使いっ走りみてーなのに頼んだら即日配達された的な？交渉も済んでて俺様の出番ナツシングウ!!って感じでさあ……困るわぁく仕事ないの超困るわぁく」

「わかった帰れ。もう良い帰れ。さっさと帰れ。食っちゃ寝して女でも抱いてろオ……ツ!!」

もう面倒は御免だとばかりに叫び俺様とベリアル君は穴へ落ちた。……え？

「ん？」

「はれえ？」

「帰れ禁手化『マジで帰って俺の胃もたない自宅送還』」

オオオオオオオオオオオオ!? そんな叫びを上げる間もなく俺様たちは穴へと吸い込まれた。



「きゃっ……!!」

我が家の猫の鳴き声ができる………てことはマジで自宅到着? ええ………?

「禁手使うほど嫌だったのお………?」

さすがの僕ちゃんでも読めねえよ、それ。

あ、予測とか超苦手分野でしたテヘペロ(きもい)

「あ、あのフリード様………?」

「あー気にしねえーでイーヨオ。ハハハ、バカサマ狂化しなかつただけマシかなあ………?」

取り間あれだわ、ベリアルつちが自宅送還されたのが問題かなあ? ま、話しは済んでるし良いよね? いつかア!

「いよっし! 気を取り直して………」

「フリード、ラーメン食べに行く」

気を、取り直して……!!

オーフィスが俺様にグレートレッド以外の食事を要求するだどっ!! え、マジ? 餌付け完了かよ! ヒヤツホウツツ!!

「グレートレッドはその後で良い」

オイ。

「いい加減よお……諦めヨーゼ! なあ!?! な!? ラーメンだけで良くない!? グレートレッドのお肉は又^{チヤーン}焼じゃねえんだからよお……」

フラグ建てたっけなあ? あれれー? おーかしーぞおー?

「……グレートレッド美味い……かも? ……あつ!?!」

キラリッって目が光った。絶対ロクなこと言わねえーよ……

「グレートレッドは食べる前が良い……!!」

「何一つ良くねえーよっつっ!!」

何で俺様ほのぼのしてんだよおー。意味わかんねえ。

ロクでもないことは言うじゃねえよ! やるんだよチクシヨウ!

聖槍使いに何かやったら天罰でも降ってくんのかな? そういう状況じゃねえかな!?

そんなこんなで何時も通りな『チート転生者^{フリード・セルゼン}「屑野郎」』と『真なる赤龍神帝^{アポカリユプス・ドラゴン}「グレー

『トレッド』を又焼扱いする『無限の龍神ウロボロス・ドラゴン「オーフィス」』の日常風景は在ったのだった

……

「……あの、私もいるんですけど……」

「え？ ああ？ うん。忘れてねえよ？ うんうん！ 一緒に三人でラーメン屋行こうぜー？
グレートレッド

又 焼ユキなんかほつとけよ、な？」

「……わかった。ラーメン屋行く……」

取り敢えずオーフィス発案『グレートレッド又焼計画』は防がれたのだった。

……その後、ラーメン屋に着くまでオーフィスの口から「グレートレッド旨い……？

不味い……？？でも美味かも……!!」と呟かれていたのは嘘か、真か……!?

《H+EROの姿は……》

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「はああああああああああああああああああ!!!」

現在、ヴァ^元ァ^{天龍}ァ^のリ^担とイツ^手セーは同じ場所でアザゼルの指示を受けながら特訓をしている。

複数の神器を己の物として、それぞれの力を合わせて、バランス・プレイヤー 禁手の出力を上げている。

天才ヴァァーリ・ルシファァーは既に魔王クラス突破しかけており、本来の主役兵藤一誠もまた、魔王クラスに突入済みである。この二人化物か

この事態にアザゼルも頭を抱えていた。確かに今は戦力が欲しい時だが、だが、だが……!!

「限度があんだろっ……!!」

吐き捨てるように言われたその台詞は何に對してか、二人の成長速度？それともイツ
セー一人？

ああ、ヴァーリはわかる、いや十分オカシイがわかるのだ（無理矢理）。

素質があつたし努力もしていた。強さにかける想いは純粹だった。

しかし、兵藤一誠はどうだ？

オカシイだろうが。才能は感じない。『赤龍帝唯一のの籠手長所』は奪われた。なのに何だこれ
は？

「何なんだ？この成長速度は……？」

わけがわからないよ、とアザゼルは無性に酒が飲みたくなった。



「はあ……」

外の様子を見てリアス・グレモリーは一度、溜息を吐く。

「リアス……いいのですか？あれで」

「ええ……言つても止まらないなら、いけるところまでいった方が良いモノ」

そんな彼女の姿を見て声をかけるのは親友のソーナ・シトリーである。そう、参加しているのだ。この特訓に。しかし、ソーナとその下僕たち、及びにイツセーを除くリアス一向は二人にはついていけない。ついていけるわけがない。だからこそ休憩に入っているのだ。

というか普通やらないだろう24時間ぶっ続けの特訓なんて。普通に死ぬわ。

「……………」までやつても十中八九は無駄、か……」

「……………」リアス、滅多なこととは言わないで下さい……」

思わず呟くりアスにソーナは言う。なにも勝てると思っっている訳ではない。ただ、自分の下僕の全力に「これも無駄か」と眺めているのが気に触っただけだ。

「そうね。でもね、ソーナ。全力で精一杯頑張って、それはスゴく素敵なことだけど……個人がどれだけやったって、と思うこともあるでしょう？仕方ないと思うでしょう……？」

敵があまりに強大すぎて、その敵に下僕を拐われ、心を揺らされ、さらには過酷な特訓を積み、もうリアスの精神は崩れかけなのだ。

「リアス……………」必ず、必ず取り戻しましょう……………貴女の家族を」

それは小猫のことであり、グレイフィアのことだろう。

——ああ、そんなことは不可能だろう。

頭を過つたその言葉は言わずに、どうにか笑顔で答えて見せた。

「……ええ、そうね。頑張りましょう。頑張りさえすれば出来る、わ……きつと、ね？」
そうあつて欲しいと思う心忘れず、されどそうならない現実をリアスは知っていた。
それでもソーナ大事な親友に心配はかけまいと笑顔で……

守るべき者に目を向けず、鍛え続ける本来の主人公。彼には最早、HもなければER
Oもなく、HEROでさえなくなりかけているのではないか……側にいる者の崩壊に気
付かず何を救えるというのだろうか……